
土地分類基本調査

御在所山

(滋賀県の区域に限る)

5万分の1

国土調査

滋賀県

1989

序 文

本調査は、国土調査法に基づき本県が昭和55年から実施しており、今回「御在所山」図幅の成果をとりまとめました。

本県では、去る昭和62年6月に「湖国21世紀ビジョン」をとりまとめ、21世紀に向けてひとと自然が調和する郷土づくりを目ざし、新しい視点に立った滋賀づくりをすすめているところです。この中で土地利用については、魅力ある県土づくりをすすめるため、県土に限られた資源であることを認識し、公共の福祉を優先しながら各種の土地需要に適切に対処するとともに、地域特性に配慮した計画的、効率的な土地利用を推進することを唱っております。

本調査がこうした県土基盤づくりの基礎資料として多くの人々に利用されることを願いますとともに、本調査の実施に当たって御協力をいただいた関係者各位に対し、深く感謝いたします。

平成2年3月

滋賀県企画部長 飛 弾 直 文

ま え が き

1. 本調査は、国土調査法（昭和26年法律第180号）第5条第4項の規定により国土調査の指定を受け、滋賀県が都道府県土地分類基本調査作業規程に基づいて実施したものである。
2. 本調査は、土地の自然的条件のうち、土地の基本的性格を形成している地形、表層地質、土壌の三つの要素を基礎として、これに傾斜区分、水系・谷密度、起伏量および土地利用現況を加味し、その成果を相互に有機的に組合せることによって、科学的な土地利用の基礎資料を提供するものである。
3. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
4. 調査機関および調査担当者は次のとおりである。

指 導 国土庁土地局国土調査課
総 括 滋賀県企画部土地対策課

地形分類調査（傾斜区分、水系・谷密度、起伏量の各調査を含む。）

滋賀大学教育学部 教 授 小 林 健太郎

表層地質調査 滋賀地学研究会

土壌調査および土地利用現況調査

（農地） 滋賀県農業試験場 環境部 専門員 辻 藤 吾
主任技師 柴 原 藤 善
技 師 西 村 誠
技 師 吉 村 眞 弓
技 師 浅 井 治 善
（林地） 滋賀県森林センター 林業専門技術員 和 田 信 雄

目 次

序 文

まえがき

総 論

I 位置および行政区画 1

II 地域の概況 3

各 論

I 地形分類図 13

II 表層地質図 33

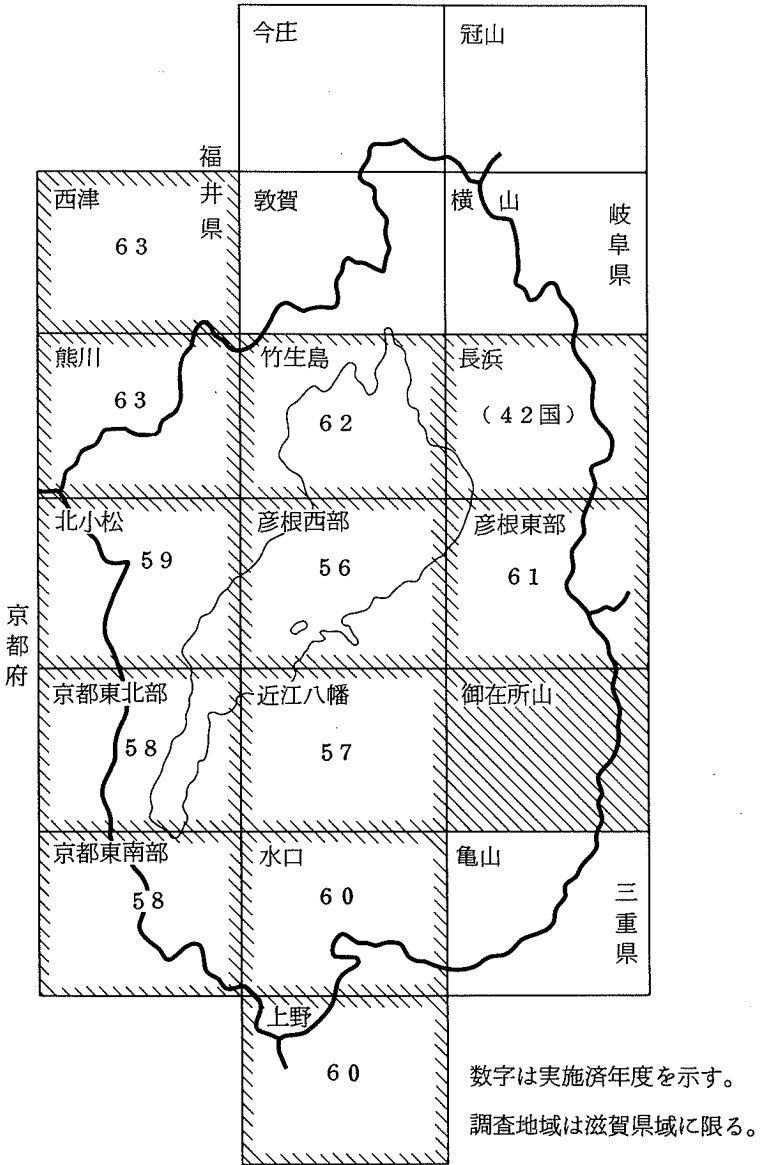
III 土 壌 図 51

IV 地形断面図・傾斜区分図 69

V 水系・谷密度図 72

(添付図 … 土地利用現況図)

位 置 図



総

論

I 位置および行政区画

1. 位置

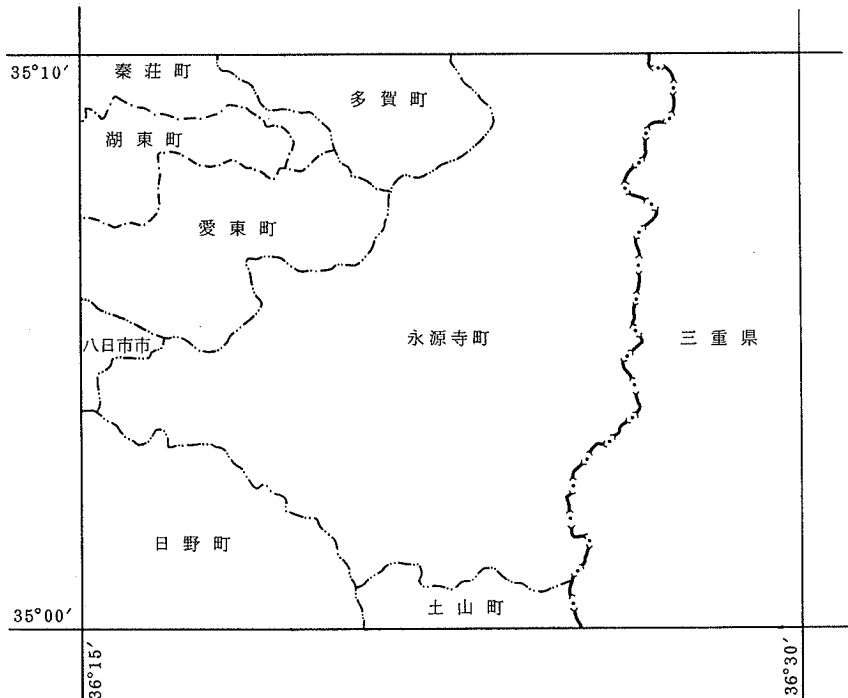
「御在所山」図幅は、滋賀県の南西部に位置し、経緯度では東経 $136^{\circ}15'$ ~ $136^{\circ}30'$ 、北緯 $35^{\circ}00'$ ~ $35^{\circ}10'$ の範囲である。

本図幅の面積は約 421.3km^2 であり、そのうち調査対象面積（滋賀県の区域）は約 316.3km^2 である。

2. 行政区画

本図幅に含まれる市町村は第1図のとおり、八日市市、甲賀郡土山町、蒲生郡日野町、神崎郡永源寺町、愛知郡愛東町、湖東町、秦荘町および犬上郡多賀町の1市7町である。

第1図 位置および行政区画



第1表 市町村別面積

区分 市町村名	図幅内面積		市町村 全面積(B)	(A) / (B)
	実数(A)	構成		
八日市市	3.9 km ²	0.9 %	53.19 km ²	7.3 %
土山町	11.4	2.7	126.20	9.0
日野町	45.2	10.7	118.13	38.3
永源寺町	170.0	40.4	179.51	94.7
愛東町	37.7	8.9	41.55	90.7
湖東町	15.5	3.7	26.35	58.8
秦荘町	10.9	2.6	25.03	43.5
多賀町	21.7	5.2	134.29	16.2
小計	316.3	75.1	704.25	44.9
三重県域	105.0	24.9	—	—
合計	421.3	100.0	—	—

資料：建設省国土地理院「昭和62年全国都道府県市区町村別面積調」

(昭和62年10月1日現在)

(注) 図幅内面積はプラニメータにより5万分の1地形図を計測したものである。

Ⅱ 地域の概要

Ⅱ-1 地 勢

本図幅の大部分は山地が占めており、図幅の西部には山地から流れ出る川により形成された扇状地がある。また、図幅の南西部の日野町が占める地域には、丘陵地が存在している。

図幅の東部には、北から藤原岳（1,143 m）、竜ヶ岳（1,100 m）、釈迦ヶ岳（1,092 m）、御在所山（1,210 m）といった山々が連なり、鈴鹿山脈の陵線を形成しており、同時にこれが三重県との県境となっている。また、この図幅内で最も標高が高いのは土山町と永源寺町との町界にある雨乞岳で、高さは1,238 mである。これらの山々からは、宇曽川、愛知川、蛇砂川等が琵琶湖へ流れ出ている。

Ⅱ-2 気 象

本図幅内には、気象庁の気象観測所は存在しないが、図幅のほぼ中央部にある永源寺ダム堰堤地点における気温、降水量および積雪日数は、第2表に示すとおりである。

第2表 永源寺ダム 堤地点月別平均気温等調べ

区分 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均 (合計)
9時気温℃	0.6	0.9	4.8	11.5	16.9	20.8	23.9	25.6	21.4	15.1	9.0	3.3	12.8
最高気温℃	4.6	4.8	9.1	16.4	21.8	25.0	27.7	29.4	25.1	19.1	13.2	7.6	17.0
最低気温℃	-1.6	-1.6	1.3	6.3	11.2	16.2	20.1	21.4	17.9	11.1	5.6	0.7	9.1
降水量mm	68	69	115	107	140	221	241	173	188	109	70	62	1,563
積雪日数日	15	13	5	—	—	—	—	—	—	—	0	6	39

注) 数値は1979年から1988年までの10年間の平均である。

Ⅱ－3 人 口

本図幅にかかると1市7町の人口動態は第3表のとおりである。これによるとこの地域の人口増加率は、昭和50年から昭和55年および昭和55年から昭和60年共に県全体の増加率を下回っている。特に昭和50年から昭和55年にかけては、永源寺町、湖東町、秦荘町、多賀町で、昭和55年から昭和60年にかけては永源寺町において、それぞれ人口が減少している。

また、第2図「地域メッシュ別人口」によると昭和55年における本図幅内の人口は26,615人で、県人口の2.5%を占める。

第3表 市町村別人口

区分 市町村名	昭和50年	昭和55年	昭和60年	増 加 率	増 加 率
	市町村別 人口(A)	市町村別 人口(B)	市町村別 人口(C)	50～55年 (B) / (A)	55～60年 (C) / (B)
八日市市	34,653人	37,776人	39,744人	109.0%	105.2%
土山町	9,379	9,469	9,925	101.0	104.8
日野町	20,913	21,680	22,009	103.7	101.5
永源寺町	6,853	6,841	6,786	99.8	99.2
愛東町	5,740	5,775	6,247	100.6	108.2
湖東町	9,798	9,508	9,513	97.0	100.1
秦荘町	8,073	7,962	8,050	98.6	101.1
多賀町	9,382	9,284	9,353	99.0	100.7
計	104,791	108,295	111,627	103.3	103.1
滋賀県	985,621	1,079,898	1,155,844	109.6	107.0

資料：昭和50年、55年、60年国勢調査

Ⅱ－４ 産 業

本図幅にかかると、市町の産業別就業人口および構成比は第4表のとおりである。これによると、本地域は、県全体の平均と比べて第1次産業および第2次産業の構成比が高く、第3次産業の構成比が低い。

第4表 産業別就業人口

(単位：人、%)

産業別 就業 人口 市町村名	昭 和 6 0 年							昭 和 5 5 年 構 成 比		
	第 1 次 産 業		第 2 次 産 業		第 3 次 産 業		計	第 1 次 産 業	第 2 次 産 業	第 3 次 産 業
		構 成 比		構 成 比		構 成 比				
八日市市	1,747	8.9	8,556	48.6	9,333	47.5	19,636	12.5	40.8	47.8
土山町	729	14.0	2,604	50.2	1,859	35.8	5,192	17.9	45.8	36.3
日野町	1,630	14.4	4,828	42.5	4,899	43.1	11,357	19.7	38.7	41.6
永源寺町	714	19.7	1,526	42.2	1,380	38.1	3,620	24.0	38.9	37.2
愛東町	609	19.1	1,471	46.3	1,100	34.6	3,180	25.6	42.5	31.9
湖東町	723	14.7	2,498	50.9	1,687	34.4	4,908	19.8	47.9	32.3
秦荘町	701	16.7	1,901	45.2	1,599	38.1	4,201	22.8	41.4	35.8
多賀町	678	14.3	2,189	46.3	1,860	39.4	4,727	17.1	43.0	39.9
計	7,531	13.3	25,573	45.0	23,717	41.7	56,821	17.8	41.5	40.7
滋賀県	46,399	8.4	229,897	41.4	278,104	50.2	554,400	11.7	40.0	48.3

資料：昭和55年、60年国勢調査結果

① 農 林 業

本図幅にかかると、市町の総農家数は10,894戸で、県下総農家数の約15%を占め、経営耕地面積は9,872haで県下総経営耕地面積の約18%を占める。また、総農家数のうち専業農家の占める割合は4.3%で、県全体の専業率とほぼ同様である。

第 5 表 農 林 業 の 概 要

区 分	総 農 家 数			経 営 耕 地 面 積 (ha)	農 業 粗 生 産 額 (百 万 円)					林 野 面 積 (ha)	
	総 数	専 業 (戸)	兼 業 (戸)		専 業 率 (%)	総 額	米	野 菜	畜 産		そ の 他
市 町 村 名											
八 日 市 市	2,265	99	2,166	4.4	4,834	2,956	432	884	562	874	
土 山 町	1,014	45	969	4.4	2,445	731	91	611	1,012	10,078	
日 野 町	2,406	110	2,296	4.6	4,347	2,370	155	1,511	311	6,188	
永 源 寺 町	939	36	903	3.8	1,380	911	80	256	133	16,403	
愛 東 町	870	56	814	6.4	1,941	1,091	204	285	361	2,388	
湖 東 町	1,268	35	1,233	2.8	2,019	1,425	126	208	260	706	
秦 荘 町	1,117	32	1,085	2.9	1,771	1,217	132	179	243	918	
多 賀 町	1,015	58	957	5.7	960	632	89	182	57	11,617	
計	10,894	471	10,423	4.3	18,787	11,333	1,309	4,116	2,939	49,162	
滋 賀 県	71,565	3,138	68,427	4.4	100,026	65,645	8,823	13,292	12,266	205,528	

資料：総農家数、経営耕地面積 — 1985年世界農林業センサス結果報告書
 農業粗生産額、林野面積 — 滋賀県農林水産統計年報（昭和62年次）

② 工 業

本図幅にかかる市町の工場数、従業者数および製造品出荷額等は、第6表のとおりである。これによると、従業者1人当りの製造品出荷額等は2,892万円で、県全体の数値とほぼ同様である。

また「地域メッシュ別事業所数」（第3図）によると、昭和60年における本図幅内の事業所数は246で、県全体の約3%を占める。

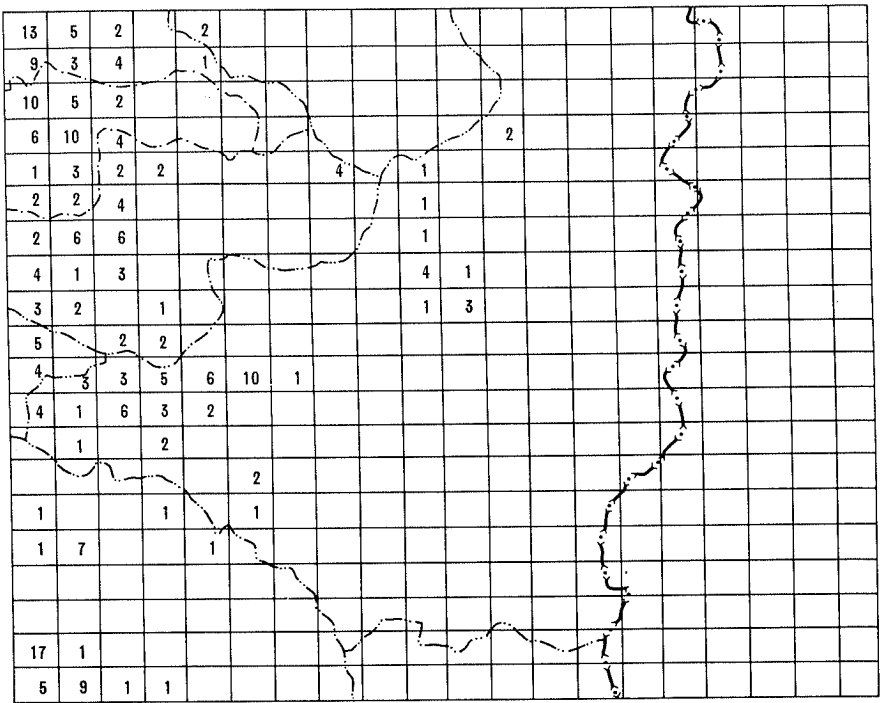
第6表 工業の概要

区分 市町村名	工場数				従業者数(人)			製造品 出荷額等 (万円)
	総数	会社	組合	個人	総数	常用 労働者	個人 家族	
八日市市	142	83	3	56	6,343	6,239	104	17,469,673
土山町	72	39	1	32	1,501	1,432	69	3,325,029
日野町	83	53	2	28	2,108	2,065	43	5,160,606
永源寺町	31	11	1	19	386	302	34	200,155
愛東町	40	24	0	16	877	859	18	1,652,218
湖東町	61	34	1	26	1,482	1,434	48	7,196,208
秦荘町	55	34	0	21	1,163	1,129	34	2,011,770
多賀町	50	28	0	22	1,497	1,461	36	8,803,776
計	534	306	8	220	15,307	14,921	386	45,819,435
滋賀県	4,330	2,855	43	1,432	151,594	149,200	2,394	438,448,112

注) 従業者4人以上のものに限る。

資料: 昭和62年工業統計調査結果報告書(滋賀県)

第3図 地域メッシュ別事業所数



事業所数	
本図幅内	全 県
246	8,271

資料：滋賀県企画部「滋賀県地域メッシュ統計報告書
(昭和60年工業統計調査編)」

③ 商 業

本図幅にかかる市町の商店数、従業者数および年間販売額は第7表のとおりである。これによると従業者1人あたりの年間販売額は2,427万円で、県全体の平均より約180万円少ない。

また、「地域メッシュ別商店数」(第4図)によると、昭和60年における本図幅内の商店数は444で、県全体の約2.5%を占める。

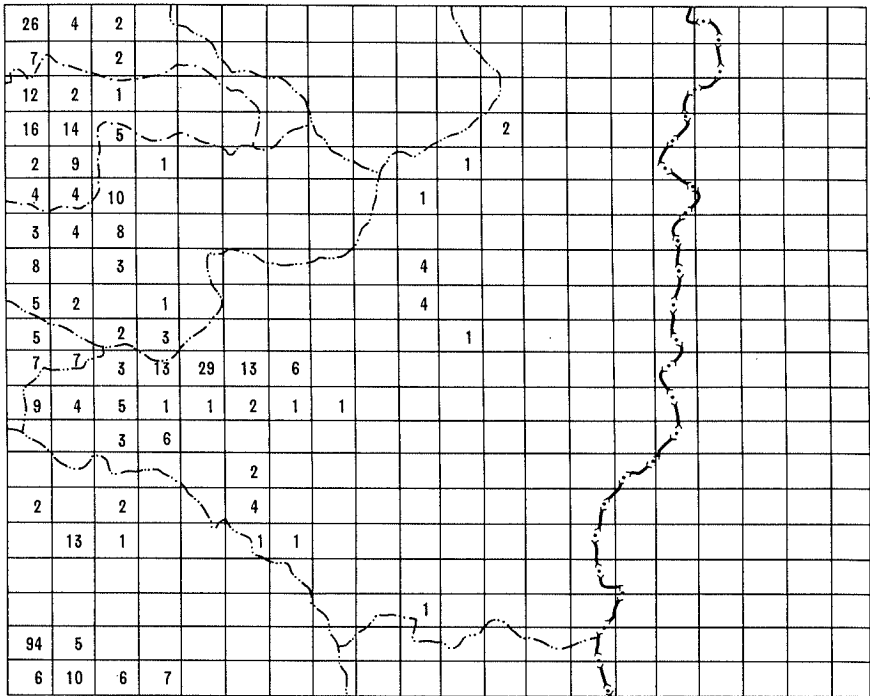
第7表 商業の概要

区 分 市町村名	商 店 数			従業者数 (人)	年 間 販 売 額 (万円)
	総 数	卸売業	小売業		
八日市市	860	166	694	3,750	12,408,052
土山町	146	10	136	498	865,705
日野町	356	25	331	1,228	1,596,920
永源寺町	111	4	107	302	312,673
愛東町	70	9	61	182	303,052
湖東町	134	3	131	307	437,354
秦荘町	117	7	110	325	714,040
多賀町	141	7	134	450	450,500
計	1,935	236	1,704	7,042	17,088,296
滋賀県	18,254	2,748	15,506	84,244	219,726,436

注) 飲食店を除く。

資料：昭和63年商業統計調査結果報告書(滋賀県)

第4図 地域メッシュ別商店数



商店数	
本図幅内	全 県
4 4 4	1 8,0 5 9

注) 飲食店を除く。

資料：滋賀県企画部「滋賀県地域メッシュ統計報告書

(昭和60年、61年商業統計調査編)」

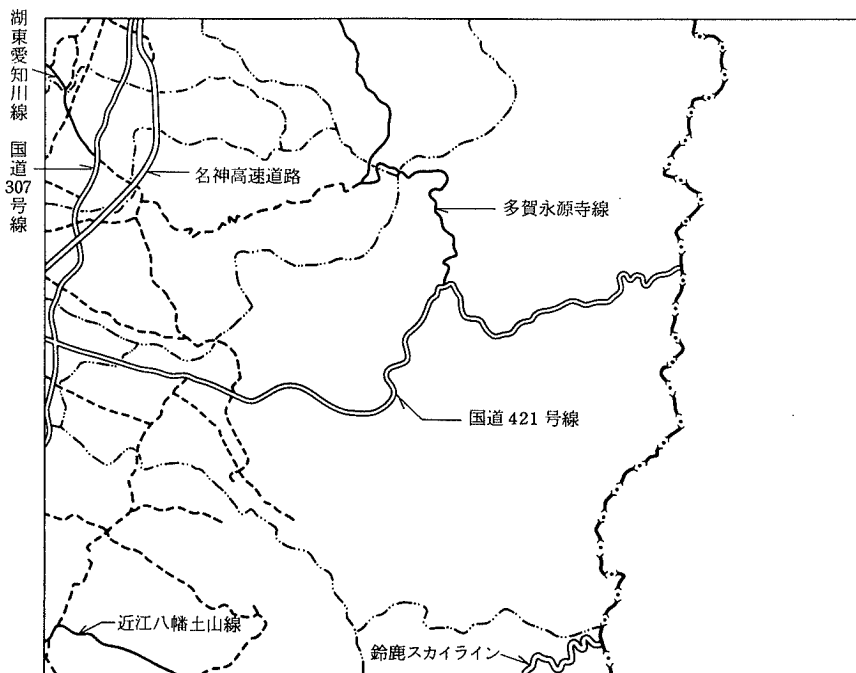
II-5 交通

本図幅を通る主な道路には名神高速道路、国道 307 号線、国道 421 号線等がある。

名神高速道路と国道 307 号線は、本図幅の西端にわずかに見える湖東平野を南北に通っている。国道 421 号線は、図幅のほぼ中央部を西から八日市市、永源寺町を抜けて鈴鹿山脈の石博峠を越えて三重県へと通じている。

また、本図幅内で鈴鹿山脈を横切るもう一つの道路として鈴鹿スカイラインが図幅の南東端にわずかに見える。

第 5 図 主要交通施設



====	有料道路	====	一般国道
——	主要地方道	- - - -	一般県道

各 論

I 地形分類図

1. 地形概要

5万分の1地形図「御在所山」図幅の範囲は、近江盆地の東辺を限る鈴鹿山脈の中央部が大部分を占め、その分水界が滋賀県と三重県との間の境界線になっている。鈴鹿山脈の西麓には、北半部では多賀丘陵と百済寺丘陵が断続的に付着しており、南半部からは布引山（八日市）丘陵と日野丘陵とが西方へ伸びている。鈴鹿山脈から流出する愛知川の南北には、谷口から西方へ向かって広がる八日市台地が展開しており、この台地を刻む愛知川沿いは細長い扇状地になっている。愛知川の北方で鈴鹿山脈の西縁に発する宇曾川とその支流はそれぞれの谷口に扇状地を形成し、複合扇状地になっているが、愛知川の南方で鈴鹿山脈から流出している佐久良川や日野川では扇状地が見られず、そのかわり河岸段丘の発達が目著である。

鈴鹿山脈は、関ヶ原低地帯に臨む北端から加太地溝かぶとに接する南端まで、延長約55kmにわたって南北走している地壘山地で、北から南へ向かって霊仙山（1,084m）御池岳（1,241m）、藤原岳（1,143m）、御在所山（1,210m）などの山頂が連なっている。本図幅に含まれるのは藤原岳から御在所山に至る中央部約1/3で、分水界に連なるピークはいずれも標高1,000mを越えている。竜ヶ岳（1,200m）以南の稜線部は花崗岩で構成されているのに対し、藤原岳から雨乞岳（1,238m）・綿向山（1,000m）にかけての大部分は古生層の石灰岩・塩基性火山岩・チャート・粘板岩・砂岩などで構成され、部分的に花崗斑岩や湖東流紋岩類が挿入されている。また、日本コバ山塊はほとんどが湖東流紋岩類である。山地の大部分は急斜面山地に区分されるが、藤原岳山頂付近の標高1,100m前後と、日本コバなどの標高800m前後とには、準平原遺物と思われる小起伏地が認められる。

古琵琶湖層群によって構成される丘陵地は、鈴鹿山脈南半部の西麓には広い分布域を有しているのに対し、北半部では小規模なものを断続的に付着させているにすぎない。本図幅の南西部にみられる布引山丘陵と日野丘陵は前者の一部に相当し、北西部にみられる多賀丘陵と百済寺丘陵は後者の一部である。

台地・段丘では、愛知川の古い扇状地が段丘化して形成された八日市台地の東半部が本図幅の西部に姿を見せている。この台地面のほとんどは下位段丘に区分

されるが、愛知川北方の台地には中位段丘に相当する段丘面が部分的に認められ、その東部は加領川の急傾斜扇状地に覆われている。丘陵地を刻む佐久良川と日野川の谷には下位段丘が広がり、日野丘陵の一部には上位段丘や中位段丘に区別される平坦面が断続的に分布している。これらのほか、鈴鹿山脈中の愛知川上流や犬上川（南谷）上流の谷底にも小規模な河岸段丘が点在している。

本図幅中で低地に区分されるのは、鈴鹿山脈の西麓に宇曾川とその支流によって形成された小規模な複合扇状地と、八日市台地を刻んで西北西流する愛知川沿いの細長い扇状地性低地、および本図幅の南西隅にわずかに姿を見せている日野川扇状地の一部のみで、これらは湖東平野の東縁部にあたる。

図1 起伏量図

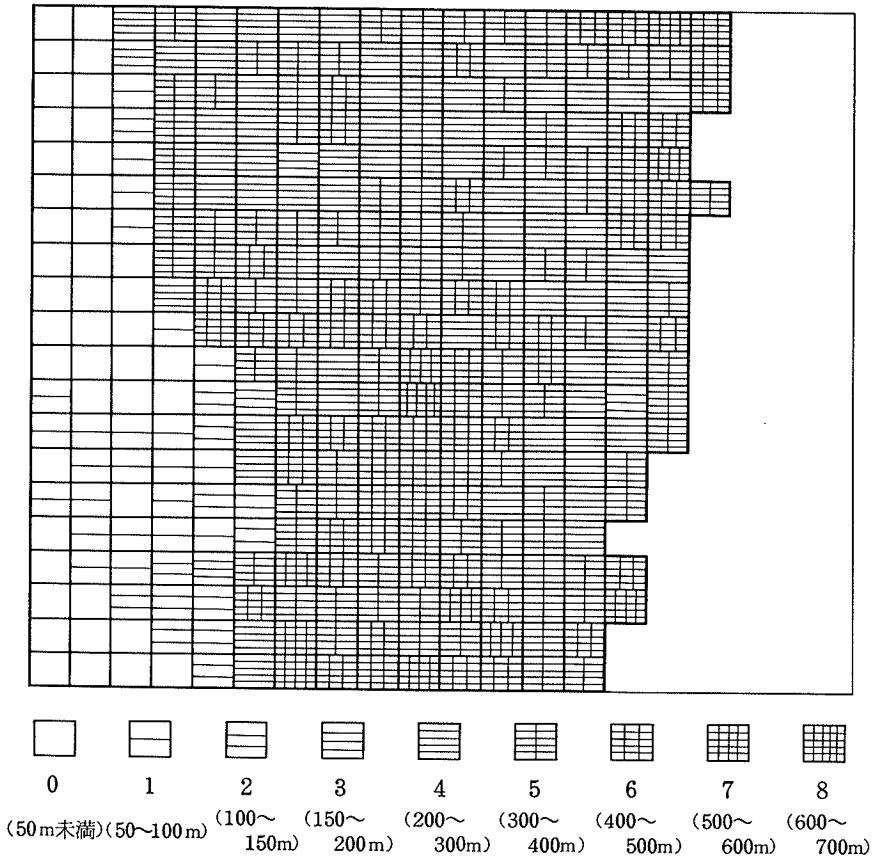


図1は、本図幅を縦横各20等分し、それによって作成される単位区画内における地形の最高点と最低点との高度差を計測して得られた起伏量の分布を示したものの(但し、三重県に属する区画については区分を示していない)で、表1には起伏量区分値ごとの区画数と構成比を示した。

表1 起伏量の区分別頻度分布表

起伏量の区分 (区分値)	頻 度	
	区画数	構成比
0 (50m未満)	43	13.7%
1 (50~100m)	24	7.7
2 (100~150m)	13	4.1
3 (150~200m)	5	1.6
4 (200~300m)	63	20.1
5 (300~400m)	93	29.6
6 (400~500m)	62	19.7
7 (500~600m)	10	3.2
8 (600~700m)	1	0.3
計	314	100.0

本図幅中の起伏量は0~8の区分に及び、最も頻度が高いのは5(区分値300~400m)の29.6%で、以下4(200~300m)20.1%、6(400~500m)19.7%、0(50m未満)13.7%、1(50~100m)7.7%、2(100~150m)4.1%、7(500~600m)3.2%、3(150~200m)1.6%、8(600~700m)0.3%の順になっている。

区分別の分布をみると、0は湖東平野と八日市台地、および布引山丘陵と日野丘陵の一部(佐久良川と日野川の河岸段丘を含む)に相当し、1は布引山丘陵の大部分と日野丘陵の一部、および湖東平野と鈴鹿山脈との境界に分布している。2および3は布引山丘陵の東端と日野丘陵の東部に集中しているが、日野丘陵東

部のほうが布引山丘陵より相対的に起伏量が大きい。

鈴鹿山脈の主要部は、起伏量の区分 3 に属する 2 つのメッシュを除いて、すべて 4 以上の起伏量区分に属し、最も出現頻度が高い 5 はほぼ全域にわたってひろく分布している。これに次ぐ 4 も 5 に似た分布を示しているが、4 の場合は鈴鹿山脈分水界の西側と日本コバ山塊にやや集中しているのが注目される。6 以上の大起伏を示すのは、本図幅中の代表的なピークである藤原岳・竜ヶ岳・御在所山・雨乞岳の山頂付近と綿向山の周辺、および愛知川上流の深い V 字谷を含むメッシュで、本図幅中最大の起伏量 8 を示すのは、愛知川の支流、佐目子谷川右岸の区画である。

2 地形区の区分

本図幅の地形分類は、地形図および国土基本図の読図、空中写真の判読、および現地調査の成果を総合的に比較検討することによって行い、海拔高度、起伏量、谷密度、地形面の形状と性質、構成物質、地域的なまとまりなどを基準にして地形区を区分した。

本図幅の大部分を占める山地 (I) はすべて鈴鹿山脈 (I a) に属し、そこを深く刻んで流れる犬上川 (南谷) と愛知川の本支流河谷、および野洲川上流の谷によって、五つの山塊に区分される。その 1 は御池岳山塊 (I a₁) で、この山塊の中心部は北接する「彦根東部」図幅に属しているが、その南端が本図幅にも姿を見せている。本図幅では、犬上ダムの人工湖からそこへ注ぐ板ヶ谷を遡り、永源寺町君ヶ畑で御池川上流の河谷に出た後はこの谷を北東に辿り、小鞍部を越えて茶屋川上流の永源寺町茨川を經由、三重県境の治田峠に至る線の北に広がる山地がそれで、藤原岳が主峰である。その 2 は日本コバ山塊 (I a₂) で、北東辺は上記の線で御池岳山塊に接し、東は茶屋川の河谷、南は愛知川本流の V 字谷、西は秦川山 (松尾寺山) から角井峠を経て明神山に至る鈴鹿山脈西辺の急崖によって限られている。その 3 は竜ヶ岳から釈迦ヶ岳を経て御在所山に至る鈴鹿山脈中央部の脊稜山地で、最高峰の名を採って御在所山山塊 (I a₃) と名付けた。北西辺は茶屋川、南西辺は神崎川の河谷によって限られる。その 4 は、北を愛知川本流の V 字谷、東を神崎川の河谷、南を野洲川河谷、西を綿向山から北へ続く鈴鹿山脈西辺の急崖に囲まれた雨乞岳山塊 (I a₄) で、最後は野洲川以南の鎌ヶ岳

山塊（Ⅰa₅）であるが、この山塊の大部分は南接する「亀山」図幅に含まれていて、本図幅にはその北端がわずかに姿を見せているにすぎない。

本図幅内の丘陵地（Ⅱ）は、いずれも鈴鹿山脈の西麓に展開する湖東丘陵（Ⅱa）に属しているが、愛知川以北では小規模なものが断続的に鈴鹿山脈西麓に付着しているにすぎないのに対し、愛知川以南の丘陵は広い分布域を有している。前者に相当するのは多賀丘陵（Ⅱa₁）と百済寺丘陵（Ⅱa₂）であり、後者に相当するのが布引山（八日市）丘陵（Ⅱa₃）と日野丘陵（Ⅱa₄）である。布引山丘陵と日野丘陵とはそれぞれ、西接する「近江八幡」図幅にまで伸びている。

台地・段丘（Ⅲ）では、愛知川の南北に広がる八日市台地（Ⅲa）の東半部が本図幅に含まれ、その東端が愛知川および和南川の河岸段丘となって伸びている。また、佐久良川と日野川の谷には河岸段丘が広がっており、佐久良川河岸段丘（Ⅲb）、日野川河岸段丘（Ⅲd）と、それぞれ独立した地形区とした。さらに日野丘陵の北縁に分布している中位段丘群をまとめて一つの地形区とし、鳥居平段丘（Ⅲc）とした。これらのほか、日野丘陵の一部には上位段丘に区分される平坦面が断続的に分布しているが、これらは地形区としては日野丘陵に含め、鈴鹿山脈中の愛知川上流や犬上川（南谷）上流の谷底に点在している小規模な河岸段丘も、独立した地形区としては扱わなかった。

低地（Ⅳ）は、本図幅では、宇曾川とその支流、および加領川によって形成された小規模な複合扇状地と、その南に続く崖錐性斜面、それに八日市台地を刻んで西北西流する愛知川沿いに形成された細長い扇状地性の低地と日野川扇状地のごく一部とが見られるのみで、ともに湖東平野（Ⅳa）東辺の一部を構成している。地形区としては、前者を宇曾川扇状地（Ⅳa₁）および角井峠西麓複合扇状地（Ⅳa₂）とし、後者を愛知川扇状地（Ⅳa₃）および日野川扇状地（Ⅳa₄）とした。

3 地形区区分表

Ⅰ 山 地	Ⅰa 鈴鹿山脈	Ⅰa ₁ 御池岳山塊
		Ⅰa ₂ 日本コバ山塊
		Ⅰa ₃ 御在所山山塊
		Ⅰa ₄ 雨乞岳山塊

		I a ₅ 鎌ヶ岳山塊
II 丘陵地	II a 湖東丘陵	II a ₁ 多賀丘陵 II a ₂ 百濟寺丘陵 II a ₃ 布引山(八日市)丘陵 II a ₄ 日野丘陵
III 台地・段丘	III a 八日市台地 III b 佐久良川河岸段丘 III c 鳥居平段丘 III d 日野川河岸段丘	
IV 低地	IV a 湖東平野	IV a ₁ 宇曾川扇状地 IV a ₂ 角井峠西麓複合扇状地 IV a ₃ 愛知川扇状地 IV a ₄ 日野川扇状地

4. 各地形区の説明

I 山地

I a 鈴鹿山脈

近江盆地の東辺を限って南北走る鈴鹿山脈は、北は関ヶ原低地帯を隔てて伊吹山地に相對し、南は加太^{かふと}地溝を挟んで三重県下の布引山地に続き、南西端は甲南丘陵を挟んで信楽山地と向きあっている。東辺は急峻な断層崖を伊勢平野に向け、西辺は湖東平野および湖東丘陵に接している。

鈴鹿山脈の大部分は秩父古生層の粘板岩、砂岩、石灰岩、チャートなどで構成されているが、南半部の稜線付近には中生代末に貫入してきたとされる花崗岩地域が広がり、中央部西縁の角井峠付近には湖東流紋岩類が分布している。

全体として、西方に傾斜しながら隆起したスラスト性の地壘山地であるため、東側へは急傾斜しているのに対し、西側の近江盆地に向かっては少しずつ高度を下げっており、分水界の位置も東へ偏っている。

この分水界から西流する芹川・犬上川・愛知川・日野川・野洲川などの河川は、

いずれも上流部で深い峡谷を刻んで流下しており、これらの河谷によって鈴鹿山脈はいくつかの山塊に区分される。これらの山塊のうち本図幅に含まれるのは、御池岳山塊 (I a₁) の南部、日本コバ山塊 (I a₂)、御在所山山塊 (I a₃)、雨乞岳山塊 (I a₄)、および鎌ヶ岳山塊 (I a₅) の北端部である。

I a₁ 御池岳山塊

御池岳 (1,241 m) を主峰とするこの山塊は、北辺を犬上川 (北谷) の河谷、南辺を愛知川支流の御池川の谷から茨川、治田峠^{はつた}を結ぶ線、西辺を犬上川 (南谷) によって限られ、三重県との県境をなす分水界には鞍掛峠 (790 m)、白瀬峠 (1,000 m)、藤原岳 (1,143 m)、治田峠 (770 m) がある。本図幅に含まれているのはその南部である。

本図幅中の御池岳山塊はほとんど全域が深いV字谷に刻まれた急斜面山地におおわれているが、藤原岳の山頂付近から北西に伸びる稜線のみは標高 1,000 を越える山頂緩斜面になっており、小起伏地に分類される。この小起伏地は、北西方の御池岳山頂付近に見られる小起伏地に対応するカルスト高原である。この小起伏地の滋賀県側は、茶屋川源流の谷底まで比高 400 ~ 500 m 以上も下刻されており、谷密度の低い急斜面になっている。

これに対し、茶屋川の源流以西、犬上川 (南谷) までの山地は、その中間を御池川源流の谷に刻まれており、御池川と茶屋川との間のピークは標高 1,049.5 m、御池川と犬上川 (南谷) との間のピークは標高 958.9 m で、藤原岳から西へ階段状に低下している。起伏量は 4 (200 ~ 300 m) ないし 5 (300 ~ 400 m)、谷密度はⅣ (30~39) と、いずれも鈴鹿山脈では最も出現頻度の高い階級に分類されるが、山地の斜面は傾斜 40° 以上の所が卓越する急斜面山地である。

I a₂ 日本コバ山塊

この山塊は鈴鹿山脈中央部の西半部に当たり、北端を犬上川河岸段丘、北東辺を犬上川 (南谷) 河谷とその支流である板ヶ谷の谷、および御池川上流の河谷、南東辺を茶屋川の深いV字谷、南辺を愛知川河谷、西辺を湖東平野に限られている。日本コバ山塊の大部分は本図幅に含まれているが、ハツ尾山 (610 m) 以北の北端部は、北接する「彦根東部」図幅に属している。

この山塊の大部分は湖東流紋岩類に属する溶結凝灰岩で構成されているが、角井峠以北の西斜面には石英斑岩の岩脈があり、東部の御池川河谷以東は古生層に

なっている。このような地質構成の違いが山地の地形にも如実に反映されている点に、この山塊の大きな特色がある。

溶結凝灰岩の分布域は、犬上川（南谷）および宇曾川の源流域に相当し、山塊の西辺に偏った分水界から北東方向へ流下する谷が卓越している。この地域の地表は、風化土壌化するよりもむしろ、岩石が固いままに細かく割れていく性格を有しているため、細かい山壁を発達させている点に特色があり、谷密度が相対的に高く、谷密度の頻度階級はⅤ（40～49）ないしⅥ（50～59）に分類される。犬上川（南谷）および宇曾川の上流部では山地斜面の勾配が相対的に小さく、中間斜面山地に分類される所も散在しているが、全体としては急斜面山地に分類される所が多い。とはいえ、傾斜 40° 以上の斜面は小規模なものも点在しているにすぎない。日本コバの山頂（934.2 m）付近では、標高800 m以上の部分が小起伏地に分類される山頂緩斜面になっている。しかし、犬上川（南谷）と宇曾川が深いV字谷を刻む北部と、愛知川の河谷に臨む南端部では、傾斜 40° 以上の斜面が卓越する急斜面山地になっている。

これに対し、石英斑岩で構成される西斜面は、幅1～1.5 kmの間が比高300 mを越える急斜面になっており、ここでは起伏量の階級5（300～400 m）のメッシュが南北に並んでいる。この斜面では山麓に向かって必率的に開析が進んでおり、山壁は溶結凝灰岩の地域よりも1オーダー大きく、これに対応して谷密度は低くなっている。

一方、東部の古生層地域は、御池川と茶屋川の深いV字谷に刻まれているため、起伏量が大きく、谷密度が相対的に低い、傾斜 40° 以上の斜面が卓越する急斜面山地になっている。御池川と茶屋川の間、標高755.6 mの三角点付近の稜線は部分的に傾斜が緩く、小起伏地に分類される。

I a: 御在所山山塊

鈴鹿山脈の中核をなすこの山塊では、北端の治田峠（770 m）から南端の武平峠（877 m）までの県境稜線に、竜ヶ岳（1,099.6 m）・釈迦ヶ岳（1,092.2 m）・御在所山（1,209.8 m）といった鈴鹿山脈を代表するピークが連なり、その間の鞍部には石樽峠（689 m）・八風峠（938 m）・中峠（895 m）・根の平峠（803 m）・国見峠（1,088 m）などの峠道が開かれている。これらの峠道は、かつて木地師や近江商人によって盛んに利用された歴史を有している。

この山塊は、北は治田峠から茨川に下る谷筋を境に御池岳山塊に接し、北西は茶屋川の谷で日本コバ山塊と、南西は神崎川の谷で雨乞岳山塊と限られ、南は武平峠を隔てて鎌ヶ岳山塊に続いている。この山塊の地形的単元としての東辺は、三重県域に属する鈴鹿山脈の東麓まで達するが、この地形分類図は滋賀県域のみを対象としているため、ここでは取りあえず県境稜線までをこの地形区とした。

この山塊のうち、石樽峠から八風谷を経て茶屋川と神崎川の合流点に至る線以北は、古生層の粘板岩や砂岩・チャートなどで構成され、傾斜 40° 以上の斜面が卓越する深いV字谷に刻まれた急斜面山地になっており、起伏量は大きいのが、谷密度は相対的に低くなっている。

これに対し、上記の線以南のこの山塊を構成しているのは、中生代末に貫入してきた花崗岩類で、三重県側には急崖を連ねているが、滋賀県側には比較的緩やかな斜面が多く、中間斜面山地に分類される地区がかなりの広がりを見せている。この地区の起伏量は相対的に小さく、起伏量の階級区分3(150~200m)にすぎないメッシュも一つ含まれているが、山壁は細かく刻まれていて谷密度は高く、八風峠の西方には、谷密度の頻度階級Ⅷ(70~79)と、本図幅中の最高を示すメッシュがあり、その西には頻度階級Ⅶ(60~69)のメッシュが並んでいるのをはじめ、これらの南北には頻度階級Ⅵ(50~59)およびⅤ(40~49)のメッシュが集中している。中間斜面山地を取り巻く急斜面山地は、茶屋川とその支流の八風谷、および神崎川の河谷に臨み、赤坂谷・滝谷などが刻まれて、傾斜 40° 以上の斜面も散在している。

I a 4 雨乞岳山塊

本図幅中の最高峰である雨乞岳(1,238.0m)を主峰とするこの山塊は、本図幅中央部の南半に広い面積を占めており、北は愛知川の谷を隔てて日本コバ山塊に相對し、東は神崎川の谷で御在所山山塊に接している。南は野洲川河谷で鎌ヶ岳山塊と境しているが、この山塊の南端は「亀山」図幅に含まれ、西は竜王山(826.3m)や綿向山(1,100m)などの急斜面が湖東丘陵に臨んでいる。

この山塊は大部分が古生層の塩基性火山岩・砂岩・粘板岩・チャートで構成されているが、雨乞岳の山頂や綿向山の山頂付近、および北部の一部には花崗斑岩の岩脈が見られ、北部の永源寺ダム南岸から南南東にかけては溶結凝灰岩類も分布している。

このような地質構成上の差異も、この山塊ではほとんど地形的な差異を生みだしてはおらず、局部的に見られる中間斜面山地や山頂緩斜面、山腹・山麓緩斜面を除いて、ほとんど全域が急斜面山地になっている。この山塊を刻む谷は、いずれも深いV字谷になっており、谷壁は傾斜 40° 以上を測るものが多く、起伏量も大きくなっている。とりわけ、北部の佐目子谷川と、南部で雨乞岳と綿向山とを分ける白倉谷川の谷では急斜面が卓越しており、佐目子谷川の下流右岸には、標高 960 m の稜線から 350 m の谷底まで比高 610 m の起伏を測るメッシュが見られ、本図幅中最大の起伏量となっている。また、これに次ぐ起伏量階級を示す7 ($500\sim 600\text{ m}$)・6 ($400\sim 500\text{ m}$)・5 ($300\sim 400\text{ m}$)のメッシュがこの山塊のほとんど全域を覆って、起伏量の大きさを端的に示している。これに対し、谷密度の方はそれほど大きくはなく、大部分が頻度階級Ⅳ ($30\sim 39$)およびⅤ ($40\sim 49$)である。

この山塊に見られる山頂緩斜面はいずれも小規模なもので、雨乞岳山頂の北方 $1\sim 2\text{ km}$ の稜線と、その北方 2 km の標高 $1,076.8\text{ m}$ 三角点の付近に見られる標高 $1,000\sim 1,100\text{ m}$ のもの、および永源寺町佐目と甲津畑の中間に位置する標高 $700\sim 800\text{ m}$ のものが目立つ程度である。山腹・山麓緩斜面は永源寺町^{ゆずりお}紅葉尾集落の背後に比較的まとまったものが見られるほかは、ごく小規模なものが谷沿いに散見されるにすぎない。

I a₅ 鎌ヶ岳山塊

鎌ヶ岳 ($1,160\text{ m}$) を主峰として野洲川上流河谷の南に広がるこの山塊は、ほとんど全域が南接する「亀山」図幅に属しているが、最北端のごく一部ののみが本図幅に含まれている。これは鎌ヶ岳の山頂から北および北西に伸びる稜線で、武平峠で御在所山山塊に接している。本図幅に含まれている部分は、起伏量階級5 ($300\sim 400\text{ m}$)、谷密度頻度階級Ⅳ ($30\sim 39$)の標準的な山地で、急斜面山地に分類される。

II 丘陵地

II a 湖東丘陵

鈴鹿山脈の西麓に広がる丘陵地を総称して湖東丘陵という。この丘陵地は鮮新世末期から更新世にかけて古琵琶湖の湖底に堆積した粘土や砂、砂礫層が地殻変動を

受けて変位し、古琵琶湖の水位が低下したことによって干陸化した結果形成されたもので、その構成層は古琵琶湖層群と呼ばれている。

湖東丘陵の主要部は愛知川以南に分布し、野洲川までの間に広大な丘陵地を展開しており、このうち本図幅には、布引山（八日市）丘陵（Ⅱ a₃）と日野丘陵（Ⅱ a₄）の東部が含まれている。また、愛知川以北でも、鈴鹿山脈の西麓に小規模な丘陵が断続的に付着しており、それらは、宇曾川を境として、北接する「彦根東部」図幅から伸びている多賀丘陵（Ⅱ a₁）と、宇曾川と愛知川との間に分布する百済寺丘陵（Ⅱ a₂）とに分けられる。

Ⅱ a₁ 多賀丘陵

多賀丘陵は、北は多賀町多賀から南は秦荘町松尾寺付近まで、鈴鹿山脈中央部の西麓に分布する丘陵地で、分布域のほぼ中央を北西流する犬上川によって北部と南部とに分断されている。本図幅に属するのは南部の南端部で、古琵琶湖層群のうち蒲生累層に相当する粘土・砂および礫の互層から構成されているが、秦川山（松尾寺山、469.0 m）の山麓では崖錐性斜面や押し出し扇状地などに覆われている。

本図幅中の丘陵の標高は150～200 mであるが、秦川山山麓の崖錐性斜面や押し出し扇状地の頂部は標高300 m前後にまで達している。標高200 m付近までは傾斜20°以下の緩傾斜地が多いが、200 mを越えると20°以上となるものの、傾斜30°以上の山地斜面との境界は明瞭である。湖東三山の一つ、金剛輪寺は、秦川山西麓のこの傾斜変換点に立地している。

Ⅱ a₂ 百済寺丘陵

宇曾川と愛知川との間で日本コバ山塊の西麓に付着している小規模な丘陵が百済寺丘陵で、崖錐性斜面や押し出し扇状地に覆われているところも少なくない。この丘陵は段丘化した2段の隆起扇状地という性格が強く、深さ10～30 mの谷が刻み込まれている。この隆起扇状地面の傾斜は8～15°であるが、段丘崖に相当する末端部や谷に刻まれた縁辺部、および山地に接する部分では傾斜15°以上と、丘陵地としては急斜面になっている。しかし、傾斜30°以上の山地斜面との境界は明瞭で、湖東三山の一つに数えられる百済寺はこの傾斜変換点に立地しており、境内からは湖東平野を一望に納めることができる。

一方、湖東町平柳の東方にはかなり広い崖錐性斜面が挿入されており、ここで

は山地に近い東部で傾斜 $8\sim 15^\circ$ 、緩傾斜扇状地に移行する西部では傾斜 $3\sim 8^\circ$ と、隆起扇状地面よりは相対的に傾斜が緩く、そこを刻む谷も浅くなっている。

II a₃ 布引山（八日市）丘陵

この丘陵は、永源寺町甲津畑付近から西方へ伸びる東西 14 km 余、南北 2 km 前後の東西に細長い丘陵で、北は愛知川左岸の八日市台地に、南は佐久良川の谷に挟まれ、東端は鈴鹿山脈に付着する一方、西端は標高 130 m 前後で八日市台地に移行している。本図幅に含まれているのはその東半部で、丘陵地の標高はほとんどが $200\sim 300\text{ m}$ であるが、東端で鈴鹿山脈に接するところでは $350\sim 400\text{ m}$ にもなっている。丘陵地中のピークでもっとも高いのは甲津畑集落西方の標高 360 m 、三角点ではその北西 0.7 km に位置する 359.4 m である。

この丘陵は、東部と西部ではかなり様相を異にしている。その1は丘陵を構成している地質で、東部は主として古琵琶湖層群中の蒲生累層と呼ばれる粘土および砂を主体とした互層からなり、東端の稜線上には和南礫層わなんりやくと呼ばれる砂礫層が分布しているのに対し、西部は砂礫層を主体とする八日市累層になっている。その2は地形的な面で、東部にはほとんど段丘面が残されていないのに対し、西部では長谷野をはじめとする段丘面の発達が顕著で、これに対応して、東部では南北方向の開析谷が卓越しているのに対し、西部では東西方向の谷が丘陵を縦断するように侵入している。標高の点でも東部のほうが西部より高い。

本図幅に含まれる布引山丘陵東部の起伏量は、大部分が起伏量階級1（ $50\sim 100\text{ m}$ ）と小さく、東端部にのみ2（ $100\sim 150\text{ m}$ ）のメッシュがいくつか見られる程度であるが、谷密度は全般に高く、頻度階級Ⅳ（ $30\sim 39$ ）のメッシュが卓越し、Ⅴ（ $40\sim 49$ ）およびⅥ（ $50\sim 59$ ）のメッシュも見られる。これはこの丘陵が小規模な開析谷によって複雑に刻み込まれていることを示している。これらの開析谷の中で最大のものは、佐久良川の支流、池川によるもので、その谷底には谷底平野も形成されている。

布引山丘陵の東端は、綿向山の北斜面から流出して北北西流する和南川によって侵食されており、その谷底には河岸段丘が発達している。和南川を隔てた雨乞岳山塊の北西端には、西辺を標高 300 m 余の丘陵性山地に囲まれて、渋川の下流部に丘陵地が見られる。丘陵性山地を構成しているのは湖東流紋岩類の溶結凝灰岩であるが、その東側の丘陵は古琵琶湖層群からなり、渋川の下流には段丘面の

標高 230 ~ 260 m の中位段丘が見られる。東端は崖錐性斜面になっている。

II a. 日野丘陵

日野丘陵は、北を佐久良川の谷、南西を日野川とその支流南砂川の谷によって限られ、南東辺は鈴鹿山脈雨乞岳山塊の急斜面に接して、東西の最大延長 11 km、南北の最大幅約 6 km の、三角形に近い平面型を有しているが、その間には佐久良川の支流南川や日野川本流の谷が深く入り込んでいるため、これらの谷によって東西に伸びる三つの部分に分けられる。これらのうち中央の丘陵が最も長く、その西部は西接する「近江八幡」図幅にまで達している。一方、猪の鼻が岳の北西麓から伸びる南部の丘陵の主要部は、南接する「亀山」図幅に属し、本図幅にはその先端部のみが僅かに含まれているにすぎない。日野丘陵を構成しているのは、古琵琶湖層群中の蒲生層群で、砂と粘土の互層が卓越しているが、東部には砂礫層も見られる。

本図幅に属している日野丘陵は、西部や南西部では標高 200 ~ 230 m に過ぎず、起伏量階級も 0 (50 m 未満) にとどまって、斜面の傾斜も相対的に緩いが、東部へ行くにつれて次第に標高、起伏量共に増大し、斜面も急斜面が多くなってくる。日野丘陵中の独立標高点では、日野町西明寺集落の北西 1 km の 382 m、南西 1 km の 352 m が最も高いが、竜王山西麓に這い上がっている部分では標高 450 m 前後に達するところもある。

日野丘陵を刻む谷は、丘陵の走行に従って東南東から西北西に伸びるものと、これらに注ぐ短小なものがある。前者に相当するのは、佐久良川の支流互瀬川前川、宮川、野川などと日野川本流およびその支流出雲川であるが、後者に相当するものはいちいち名称を特定できないほど数が多い。谷密度は総じて布引山丘陵より 1 ランク頻度が高く、頻度階級Ⅶ (50~59) のメッシュも見られる。

日野丘陵では、丘陵の稜線部にかなりの段丘面が分布していることが注目される。これらの段丘面は、ここでは上位段丘に一括したが、植村善博 (1979) は最高位段丘面と高位段丘面とに区分している。段丘面の分布は日野丘陵の北半部に多い。最も標高が高いのは西明寺集落の北方約 1 km の竜王山北西麓に付着している標高 410 ~ 440 m の小起伏面で、その北東には標高 360 ~ 390 m の緩斜面も見られる。西明寺集落の南では、茶畑に利用されている標高 400 ~ 420 m の段丘面が稜線上に乗っている。日野町小野集落の東方では、標高 338 m の独立標高点か

ら西北西に向かって、かなり平坦な段丘面がよく保存されている。この段丘面の標高は 310 ~ 338 m である。

これらに比べると、段丘面の標高はかなり低くなるが、現在の河床とは直接関係しない段丘面が、日野丘陵の縁辺部に断片的に残されている。その 1 は日野町川原集落の東南東に細長く見られるもので、段丘面の標高は 240 ~ 280 m、総延長は 1.5 km 以上にも及ぶ。その 2 は日野町奥師集落の東方に見られるもので、西北西～東南東に連なる稜線上、標高 230 ~ 280 m の間を細長く伸びている。その 3 は日野町中心市街の北方、標高 230.1 m の三角点から北西に伸びる稜線に見られる、標高 210 ~ 230 m のもので、段丘面の残存状況はあまり良好ではない。これらの他、川原集落および杣集落の南方や、中之郷集落の背後などにもごく小規模な上位段丘面が見られ、中之郷集落の東部は丘陵の先端に残された中位段丘面に乗っている。

Ⅲ 台地・段丘

Ⅲ a 八日市台地

愛知川の南北両岸に広がる八日市台地は、近江盆地全体を通じて最も面積が大きい台地（段丘面）である。その範囲は、東は愛知川の谷口から、西は愛知川右岸では湖東町小田苺まで、愛知川左岸では近江八幡市平田町付近まで達し、北辺は宇曾川扇状地に覆われて明瞭な境界を欠いているが、南は布引山（八日市）丘陵とその西方への延長上に位置する布施山および雪野山によって明瞭に限られている。全体として扇型に広がり、東西の最大延長約 16 km、南北の最大幅約 10 km を測るが、その中央を愛知川が段丘崖を刻んで北西流しているため、南北に二分されている。

この台地は、愛知川によって形成された古期扇状地が、鈴鹿山脈の隆起に伴う基盤の傾動運動によって段丘化したもので、段丘面はよく保存されており、段丘崖は谷口から離れるに従って愛知川河谷の扇状地面との比高を減じている。

愛知川北岸の段丘崖の高さは、谷口の愛東町高野集落東方では 10 m 強だが、同町外集落の東方で 20 m まで拡大した後、青山集落で 15 m、妹集落で 10 m と下流へ向かうほど次第に低くなって、湖東町小田苺集落の中で比高 1 m 未満に減じ、その北西方清水付近で段丘崖は消滅している。この段丘崖上の下位段丘面は、高野

で標高 210 m 前後、外で 200 ~ 210 m であるが、これら両地区の段丘面は愛知川の側方侵食によって分断されている。下流まで連続しているのは、愛東町小倉集落北東方の標高 200 m からで、北西方へ向かって緩斜して湖東町清水の標高 125 m 付近で新时期扇状地に移行している。この間の平均勾配は 10%、地表は原面の開析がきわめて軽微で、わずかな起伏が波状に見られるにすぎない。

この下位段丘面の北に中位段丘面が一段高く残されている。両者の境界をなす段丘崖は愛東町園集落付近から北西に向ってほぼ直線状に伸び、池之尻集落の東に接する灌漑用水池、恵比須溜の北東岸を画して、湖東町横溝出屋敷（横出）の付近で消滅している。この間の延長距離は約 4.5 km、恵比須溜北東岸付近での比高は 5 m を測る。中位段丘面の標高は東端の園集落東方で 200 m、西端の横溝出屋敷で 145 m だから、その平均勾配は 12.2% で、下位段丘面より若干勾配が強い。地表はこれまた波状の起伏が見られるにすぎないが、その起伏は下位段丘面のそれより大きい。中位段丘面の東端は、加領川によって形成された急傾斜扇状地に被覆されている。

愛知川北岸ではこのほか、高野集落の北方山麓に、段丘面の標高 220 ~ 240 m の小規模な中位段丘が付着しており、比高 10 ~ 15 m を測るその段丘崖は、直線的に北西へ伸びて前記の中位段丘の段丘崖に続くものと推定されるが、その間外集落の背後から園集落東方までは千手川や棚上川の急傾斜扇状地に覆われて、地表には表れていない。また、明神山（684.9 m）南西麓の谷口左岸には標高 250 ~ 280 m の小起伏地が見られ、その南西辺は比高 30 ~ 40 m の急崖に限られている。ここではこの小起伏地を上位段丘面に分類した。

一方、愛知川南岸の段丘崖は、谷口の永源寺町山上から八日市市街地の北方まで続いており、その比高は山上で約 15 m、本図幅西端の寺村新田で 5 m となり、八日市市街地北方で新时期扇状地に覆われて消滅している。段丘面の標高は山上集落南方で 210 m、本図幅の西端で 165 m となっており、この間の平均勾配は 10% と、北岸のそれと同じ値を示している。しかしこの台地面の勾配は、八日市市街地東部では 7% 前後、末端の蒲生野では 5% と、次第に小さくなっている。台地面はきわめて平坦で、ごく僅かな波状の起伏が見られるにすぎない。

この台地の南辺には、布引山（八日市）丘陵から流出する無数の小規模な谷によって形成された小さな扇状地が連続しており、幅 500 m 前後の複合扇状地帯

になっている。

また、台地の東端は愛知川河谷と和南川河谷とに分かれて伸びており、前者は愛知川左岸の河岸段丘となって永源寺ダムまで達している。この段丘面は、幅 200 ~ 400 m、標高 210 ~ 250 m で、北辺を限る愛知川に向かって緩やかに傾斜している。愛知川左岸に沿う段丘崖は比高 10 ~ 20 m の急崖をなしている。

これに対し、和南川の谷は布引山丘陵の東端を切って北北西流しており、八日市台地から続く段丘面が河谷沿いの河岸段丘になって、甲津畑集落の南東まで約 4 km も伸びている。和南川に臨む段丘崖の比高は 5 m 前後、段丘面の標高是最奥部で 350 m、谷口で 225 m を測り、その平均勾配 31.3 % は八日市台地のそれよりかなり大きく、この河岸段丘を形成した堆積物が八日市台地東端の山上新田付近まで、扇状地状に堆積している。和南川の下流は八日市台地を約 10 m 刻んで愛知川に合流しており、その谷底には狭長な谷底平野が形成されている。他方、和南川河谷と蛇砂川源流の谷の間には、段丘面の最大幅 200 m、延長約 1.5 km、標高 240 ~ 260 m の細長い中位段丘が残されている。

Ⅲ b 佐久良川河岸段丘

布引山丘陵と日野丘陵との間を西流する佐久良川の谷には、きわめて連続性の良い河岸段丘が発達している。その大部分は下位段丘で、「近江八幡」図幅に属する日野町中在寺より下流では、南岸に比高 2 m 前後の明瞭な段丘崖をもって、扇状地性低地に相当する氾濫原と区別されているが、本図幅に含まれる上流部では、広い谷底面として連続的に分布するようになっており、河川の流路のみが谷底面を刻み込んでいる。谷底面の幅は、広いところでは約 800 m にも達している。厚さ 2 m 前後の段丘礫層は巨～大礫からなり、風化を受けておらず新鮮である。

佐久良川河谷の上流で日野町原の集落を乗せている左岸の段丘は、佐久良川右岸の段丘化した谷底面より 2 ~ 3 m 高く、中位段丘に相当する。この段丘面は最大幅約 300 m、延長約 1.2 km で、標高は最上流で 250 m、最下流で 200 m を示し、北西へ向かって勾配 14.7 % の傾斜を有している。

Ⅲ c 鳥居平段丘

日野丘陵の北縁に分布している中位段丘群で、最も広い段丘面が連続しているのは、日野町鳥居平新田から「近江八幡」図幅に属する安部居まで、延長約 1.5 km、最大幅 700 m にわたるものである。この段丘面は、安部居集落の南部で標高

180 m、東南端の鳥居平新田付近で 220 m を示し、北西に向かって勾配 26.7 % で傾斜している。

これから東に続く中位段丘面は、丘陵を刻む谷によって三つに分断されている。その 1 は鳥居平集落の南西、標高 215 ~ 230 m に見られるものであり、その 2 は鳥居平集落東方の稜線上、標高 220 ~ 235 m に平坦面を残している。その 3 は宮川の谷を隔てた奥師集落東方に見られるもので、この段丘面は、丘陵の稜線上に残されている細長い上位段丘の北側、標高 220 ~ 240 m の所に、東西 800 m、南北 400 m の広がりを見せている。

Ⅲ d 日野川河岸段丘

日野川河岸段丘は、日野川の右岸、日野丘陵の南辺に沿って発達し、日野町の中心市街地を乗せている。段丘面の幅は最大 1.5 km、総延長は 9 km 余にも達し、西端は「近江八幡」図幅に属する日野町内池で扇状地面に移行している。段丘面の勾配は、東部の北畑から音羽の北方にかけては 25 % とやや大きいのが、日野町中心市街地では 13 % 程度となり、その後段丘面はほぼそのままの勾配を保ち、内池付近で勾配 6 % 前後の扇状地面下に埋没していくようである。

この段丘面の南辺を限る段丘崖は、音羽付近から西大路まで、比高 5 m 前後で日野川本流の右岸沿いに続いており、この段丘崖下、丘陵との間に刻まれた谷には幅の狭い谷底平野が形成されている。西大路・木津間にはこの段丘面を刻み込んだ日野川旧流路の谷が 2 km にわたって見られ、日野町中心市街地の南辺を限る段丘崖が、この谷に面している。この旧流路が放棄されたのは、天文 6 (1537) 年に現流路への付替工事が行われてからである。現在は現・旧両流路を堰止めて日野川ダム (昭和 41 年完成) が作られている。

日野川河岸段丘の東端は、西明寺川の谷に沿って竜王山南東麓まで伸びている。この地区の段丘面の勾配は、八丁野付近で 45 % と大きく、その北東方には一層勾配の強い中位段丘面も見られる。

Ⅳ 低 地

Ⅳ a 湖 東 平 野

湖東平野は、鈴鹿山脈から北西流して琵琶湖に注ぐ芹川・犬上川・宇曾川・愛知川・日野川等の諸河川によって、琵琶湖の東岸に形成された沖積低地で、谷口

からほぼ標高 100 m 付近までは扇状地が発達し、湖岸には三角洲が広がって、近江盆地最大の低地になっている。本図幅に含まれるのはその東端南部で、宇曾川扇状地とそれに続く角井峠西麓の複合扇状地、愛知川扇状地の東部、および日野川扇状地のごく一部である。

Ⅳ a₁ 宇曾川扇状地

宇曾川扇状地は湖東町祇園集落の東方、標高 200 m 付近を扇頂として宇曾川沿いに形成された低平な扇状地で、扇端は秦荘町下八木・島川の標高 105 m 等高線付近まで達している。この間の平均勾配は 17.3 % であるが、秦荘町軽野の標高 120 m 付近を境にして、西部では勾配 7.5 % にすぎないのに対し、東部では平均勾配が 23 % にも達し、急傾斜扇状地に近い様相を呈しているように、西部と東部ではかなり性格が異なり、狭義には東部のみが宇曾川扇状地ということになる。現在の宇曾川は、扇頂から祇園集落の西方まで、扇状地の表面を若干下刻して流れており、扇側には宇曾川支流の岩倉川や北川などが浅い谷を刻んでいるなど、狭義の宇曾川扇状地では、現地表面の起伏はそれほど単調ではない。

宇曾川扇状地の南には、宇曾川の支流、南川の扇状地があり、北川の浅い谷が両者を分けている。南川は百済寺の東方、大峠の西斜面から流出して北西流し、百済寺丘陵を南北に分ける谷に、愛東町北古屋の標高 280 m 付近を扇頂とする急傾斜扇状地を形成している。扇端は同町北坂の標高 180 m 付近で、そこには幾つかの溜め池が作られている。扇頂からここまでの平均勾配は 66.7% と大きいのが、ここから西方では平均勾配も 25% 前後に低下して、緩傾斜扇状地になっている。

この扇状地の南辺は、宇曾川の支流では最も南を流れている淵川とドン川に限られている。

Ⅳ a₂ 角井峠西麓複合扇状地

淵川とドン川の南には、日本コバ山塊の西辺を限る急斜面から流出する諸河川によって形成された小規模な扇状地や崖錐性斜面が複合扇状地のように続いている。ここではこれらを総称して角井峠西麓複合扇状地と呼ぶことにした。

これらのうち最大のものは、角井峠から流下する加領川の急傾斜扇状地で、愛東町市原の東方約 1 km の標高 280 m 付近を扇頂とし、同町上中野西方の 175 m 等高線付近を扇端としている。この間の平均勾配は 43.2% と、狭義の宇曾川扇状地よりかなり大きい。この扇状地の北西方への延長は、八日市台地の中位段丘面を

被覆する扇状地性低地になっている一方、南西辺はこの中位段丘を限る段丘崖になっている。

加領川扇状地の南東には、経田川の本支流や千手川などによって形成された崖錐性斜面が続いている。この斜面は、山麓部で $8 \sim 15^\circ$ 、末端部でも 3° 以上を示し、その先端は前記の中位段丘を限る段丘崖を覆って張り出している。急傾斜なうえ水利に乏しいため、現在もお山林に覆われている所が多い。

Ⅳ a₃ 愛知川扇状地

愛知川扇状地は、谷口から八日市市街東方までは、南北両側を八日市台地を限る段丘崖に挟まれて細長く伸びており、谷口部で約 0.5 km にすぎなかった幅員は、下流部に向かうにつれて少しずつ広くなり、標高 130 m 付近では約 2 km となる。本図幅に含まれているのはその東半部、国道 307 号線以東で、扇状地面の平均勾配は 6.3% である。これは両岸台地（下位段丘面）の平均勾配 10% を若干下回っている。

この愛知川扇状地の東部、愛知川北岸の低位段丘を限る段丘崖の下に、愛東町小倉および外の集落を乗せている小さな段丘が付着している。小倉集落を乗せる段丘面は標高 $170 \sim 180 \text{ m}$ 、外集落を乗せる段丘面は $184 \sim 190 \text{ m}$ で、いずれも比高 5 m 足らずの段丘崖に囲まれている。高野集落の南方にも、標高 200 m のごく小さな段丘面がみられる。また、愛知川南岸の山上集落も標高 $185 \sim 196 \text{ m}$ の段丘面に乗っており、北辺は比高 5 m 前後の段丘崖で限られている。これらはいずれも形成時期の新しい沖積段丘であるが、旧期の扇状地面で構成されている八日市台地とは異なるため、地形区としては便宜上愛知川扇状地に含めることにした。

愛知川扇状地は、標高 130 m 付近を過ぎると急速に幅を広げ、ついには下位段丘面をも被覆して広闊な低地を展開させるが、この部分は「近江八幡」図幅と「彦根西部」図幅に含まれている。

Ⅳ a₄ 日野川扇状地

日野川の中流、日野丘陵と水口丘陵との間の谷に形成され、谷の形状に規制されて細長く伸びている扇状地で、その大部分は「近江八幡」図幅に含まれている。扇状地面の平均勾配は 6% 前後にすぎず、一面に条里制土地区画を残す水田が開かれている。本図幅に含まれているのは、その南東部、日野町小井口地先のごく

一部のみである。

参 考 文 献

水山高幸・池田碩・大橋健(1975)：『近江盆地・琵琶湖周辺の地形』、建設省近畿地方建設局。

池田碩・大橋健・植村善博・吉越昭久(1979)：「近江盆地の地形」『滋賀の自然』所収

国土庁土地局(1975)：『縮尺 20 万分の 1 土地分類図』(滋賀県)。

辻村太郎(1929)：『日本地形誌』、古今書院。

植村善博(1979)：「湖東丘陵の古地理と地形発達史」『立命館文学』第 410～411 号。

小林健太郎・高橋誠一(1977)：「愛知川扇状地北半部の地形と農業水利」『滋賀大学教育学部紀要一人文学・社会科学一』第 27 号。

Ⅱ 表層地質図

1 表層地質概説

5万分の1地形図、「御在所図幅」の地質は、中・古生界、中生代末に活動した深成岩と火山岩、ならびに新生界に大別される。

固結堆積物に分類されるのは、中・古生界の堆積岩である。

火成岩類に分類されるのは、中生代末の深成岩及び火山岩類で、各種の花崗岩及び湖東流紋岩類よりなる。

固結堆積物および火成岩類には、岩質と風化度によって硬・軟の差があり、また層理・節理・断層などの面構造が発達している。地形的には、鈴鹿山地の主体をなし、標高約300～1000 m前後の山地を形成している。一部は丘陵内に周囲よりやや高い小丘を形成している。

半固結堆積物は、古琵琶湖層群・時代未詳第三紀礫層・高位段丘堆積物及び中位段丘堆積物よりなる。古琵琶湖層群は、おもに標高200～400 m前後の丘陵を形成する。また、平野部では、比較的薄い段丘堆積物及び沖積層の下位に、それらの堆積物の基盤として広く分布する。時代未詳第三紀礫層の大部分は、鈴鹿山地の標高約400 m～900 mの稜線上に、互いに孤立した形で分布する。また一部は、鈴鹿山地西麓の丘陵や平地との境界部に狭い分布を示す。古琵琶湖層群と鈴鹿山地の固結堆積物及び火成岩類との境界部は、逆断層で接する場合が多い。高・中位段丘堆積物は、丘陵の上面および山地末端に、平坦面をなして分布している。

未固結堆積物は、現河岸沿いに分布する低位段丘堆積物・急傾斜山地内部及び山地と平野の境界の急傾斜地に分布する崖錐堆積物、および主として扇状地堆積物よりなる沖積層である。これらはほとんどが砂礫よりなり、浅層地下水の帯水層となっている。

なお、本図幅の地域に関する最新の資料として、地質調査所の地域地質研究報告5万分の1地質図幅「御在所山」地域の地質（原山他、1989）が、刊行された。本図幅のまとめにあたってこれを一部参考にしたが、その関係は下記の通りである。

固結堆積物の岩層区分の境界は、主に筆者らの独自の調査によるものである。筆者らの岩層区分に、原山他（1989）の層序区分をあてはめると下記のように

なる。

本 図 幅		原山他(1989)の相当する地層区分
記号	区 分	
S m	砂岩および泥岩 (砂岩に富む相)	愛知川層群箕川層(中生代ジュラ紀)
M s	泥岩および砂岩 (泥岩に富む層)	彦根層群 米原層 } (中生代ジュラ紀) 同 道ヶ谷層 } 愛知川層群 黄和田層(泥岩) (中生代ジュラ層) 野洲川層群 田村川層 } (中生代ジュラ紀) 同 土山層 } 武平峠層 (中生代ジュラ紀)
R	塩基性火山岩	愛知川層群 黄和田層(緑色岩類) (中生代ジュラ紀) 靈仙山層 (古生代二疊紀)
C h	チャート	チャート(ジュラ紀共通の岩相)
L s	石灰岩	石灰岩(ジュラ紀共通の岩相) 靈仙山層 (古生代二疊紀)

火成岩類は、湖東流紋岩類については、筆者のうち、西川他の調査による資料をもとに、一部補足調査を行って図を作製した。花崗岩類については原山他(1989)より引用した。

半固結堆積物については下記の通りである。

古琵琶湖層群については、筆者の一人、雨森の調査資料にもとづいて図を作製した。時代未詳第三紀礫層は、西川他(1979)の資料をもとに、補足調査を行って図を作製した。高位及び中位段丘堆積物は、雨森の調査資料と原山他(1989)の段丘区分を参考にして、図を作製した。

未固結堆積物については、原山他(1989)の段丘区分を参考にし、調査資料に

基ついで一部修正を加えた。

2 表層地質細説

2-1 未固結堆積物

本図幅の未固結堆積物は、低位段丘堆積物・崖錐堆積物および沖積層を形成する流路州堆積物、扇状地堆積物、谷底堆積物からなっている。

低位段丘堆積物は、原山ほか(1989)によって古い方から順に低位Ⅰ・低位Ⅱ・低位Ⅲに区分されている。このうち低位Ⅰ段丘堆積物は、日野丘陵の東端部分にごく狭い範囲に分布している。低位Ⅱ段丘堆積物は、八日市・日野丘陵周辺と愛知川北岸に広く分布している。永源寺町甲津畑の低位Ⅱ段丘堆積物中からは寒冷気候を示す植物化石が産出している(MIKI, 1956)。またこれとほぼ同層準に含まれる2つの木片の ^{14}C 年代が測定され、 $33,200 \pm 4,100$ 年 B.P. と $30,000 \pm 1,700$ 年 B.P. の値が報告されている(市原・高谷, 1965)。鈴鹿山脈中の御池川沿いに小規模に発達する段丘堆積物中には火山灰層が3地点で認められた。これらの火山灰は、いずれも約6,300年前の鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、町田・新井, 1978)である。

低位Ⅲ段丘堆積物は、低位Ⅱ段丘堆積物に沿う形で愛知川と佐久良川岸に分布している。いずれも礫がち堆積物である。

本図幅の低位段丘は、一括図示した。

崖錐堆積物は、西明寺東方山麓と明神山西麓に分布している。前者は中・古生層の角礫からなり、後者は明神山塊を構成している豊原溶結凝灰岩の角礫からなっている。

沖積層は、宇曾川から加額川の間にも最も広く分布し、愛知川および日野川流域にも細長く分布している。このうち宇曾川から加額川間のもは、複合扇状地堆積物である。

(1) 礫がち堆積物

本図幅中に分布する未固結堆積物の殆どは、礫がち堆積物である。このうち宇曾川から加額川間に分布する沖積層では、表層約1m弱の表土(主としてシルトと粘土)の下部に20m前後の厚さの巨大円礫を含む礫がち堆積物からなっている。

これに反して、その南に分布する低位Ⅱ段丘部分の礫層の厚さは、10m未満である。愛知川両岸に分布する沖積層では、垂直方向の層相変化が激しく礫がち堆積物の厚さも数mである。愛知川南方の低位Ⅱ段丘を構成する砂礫層は、場所によって5～26mの厚さの変化がある。この砂礫層の礫は巨大円礫を含むものであるが日野丘陵に近づくにつれてシルト混じりになる傾向がある。なおボーリング地点では、深さ98.8mに基盤がある。

佐久長川周辺の段丘の礫層は、5mより薄く中之郷より下流部では消滅する。

日野川流域では、地下2～5m以下の部分に3m前後の礫層が分布する。

(2) 砂がち堆積物

本図幅中では砂がち堆積物の分布はきわめて局部的である。すなわち愛知川以北では、国道307号線と名神高速道路の交差するあたりに砂礫層の上部を覆うように数mの厚さで分布するものと、日野川流域の音羽周辺に礫混じりの状態のものが分布する程度である。

(3) 泥がち堆積物

泥がち堆積物も砂がち堆積物同様その分布は、きわめて狭い。図幅の北西部の湖東町読合堂から大沢にかけての部分と八日市市市中北方に、砂礫層の上部に5m前後の泥がち堆積物が局部的に分布する。これ以外にはごく薄く礫がち堆積物を覆うようにシルトおよび粘土が表土として分布している。

2-2 半固結堆積物

半固結堆積物は、時代未詳の第三紀礫層および古琵琶湖層群とこれを不整合におおう高位段丘・中位段丘堆積物よりなる。

時代未詳礫層は、これらのうちで最も古いと考えられ、鈴鹿山脈の高所に分布するものと、鈴鹿山脈の山麓に分布するものがある。

高位段丘および中位段丘は、古琵琶湖層群からなる丘陵地の頂部、周縁部に分布する。また、愛知川以北では、鈴鹿山脈の山麓に分布する。

以上の三者は、礫を主体とした堆積物であるので、礫質の半固結堆積物とした。

これに対し、古琵琶湖層群は、分布が広く、また地層の時代的な関係が重要であるため、層序と堆積物の種類の双方を考慮して、独自の基準で区分した。

(1) 古琵琶湖層群

古琵琶湖層群は、鮮新から更新世にかけて堆積した湖沼成の堆積物であり、第

一図のように区分されている。

本図幅内の古琵琶湖層群の多くは、佐久良川流域の標高 200 ~ 400 m 前後の丘陵地（以後、佐久良川の北側の丘陵地を八日市丘陵、南側の丘陵地を日野丘陵と呼ぶことにする。）で見られるが、もちろん流域の未固結堆積物の直下にも埋没しており、その一部は川底に岩盤状に露出している。地層は地下にも広く連続しているが、本項では、地上の分布状況について述べる。

本図幅内の丘陵地の大部分は、古琵琶湖層群中の蒲生累層が分布し、瓜生津峠と秦荘町松尾寺付近の小範囲にのみ八日市累層が分布している。なお、蒲生累層は、岩相と層序により細分して地質図に表現した。第二図に、本図幅内の古琵琶湖層群の区分と総合柱状図について研究されたものを示す。

以下に、本図幅内の古琵琶湖層群について下位より説明する。

A 蒲生累層

a 浄善坊山部層（記号 smg）

地質調査所（1989）の命名。八丁野東方の綿向山と浄善坊山に挟まれた標高 400 ~ 500 m の基盤岩凹地に分布し、本図幅内では最も下位の蒲生累層とされている。本層は、砂層・粘土層・礫層からなり、亜炭層をはさむ。

b 佐久良互層（記号 mgs）

雨森（1978 MS）の命名。原や甲津畑および八丁野の東方の基盤岩沿いに分布し、基盤岩と逆断層で接し急傾斜している。本層は、火山灰層の対比から、日野粘土層と同層準であるが、細礫混じり粘土、砂、礫の互層で亜炭層を含むような層相である。

c 日野粘土層（記号 ms）

田村ほか（1977）の命名。本図幅内では、ほとんどが日野丘陵に分布し、塊状粘土層を何層か挟む粘土優勢な砂粘土互層である。ただし、北畑および日野川ダム付近では、本層の下部が見られ、砂と粘土がほぼ等量となり、よく発達した砂層が挟まれている。本層中には哺乳動物の足跡化石が見出されている。

d 中在寺砂粘土互層（記号 sm）

雨森（1978 MS）の命名。八日市丘陵および日野丘陵に、分布する。よく発達した中・粗粒砂層を挟む砂優勢な砂粘土互層である。

また、本層の最上部には、よく発達した亜炭層が水平に連続している。愛東町

外の愛知川川床や西隣近江八幡図幅の日野町蓮華寺の佐久良川川床では、この亜炭層が露出し、見事な樹根化石がある。(蓮華寺化石林層 雨森 1978 MS)

e 和南礫層 (記号 gms)

雨森(1978MS)の命名。八日市丘陵の東部に分布し、厚さ50m以上であるが西方に薄く消滅する。前述の中在寺互層と同時異相である。礫層中にうすく粘土や砂を挟むような層相である。礫は、中礫以下のものがほとんどで、古生層、湖東流紋岩類の円礫一亜円礫よりなる。

f 瓜生津峠砂礫層 (記号 sgm)

雨森(1978MS)の命名。瓜生津峠の南に分布する。また、愛知川以北では湖東町百済寺、祇園付近および宇曾川川床にも一部露出している。八日市丘陵では、礫を含む粗粒砂を主体とする砂・礫・粘土の互層であるが、上位に向かって粗粒化する。礫は、一般に中礫およびそれ以下のチャートの円礫一亜円礫が多く、よく淘汰されている。

B 八日市累層 (記号 gsm)

Yokoyama(1969)の命名。瓜生津峠から西隣近江八幡図幅にかけての八日市丘陵西部に分布する。また、愛知川以北では秦荘町松尾寺付近に分布する。八日市丘陵では、礫層を主体とした礫・砂・粘土の互層である。礫は、中～大礫のチャートの円礫一亜円礫が多い。松尾寺付近では、礫層の発達がよく、古生層、湖東流紋岩類の中・大礫よりなる。

(2) 半固結堆積物の全体像

次に、古琵琶湖層群を含めて半固結堆積物の全体像について述べる。

A 礫質堆積物 (記号 g)

礫質堆積物は、前述した古琵琶湖層群中の八日市累層と高位段丘・中位段丘堆積物および時代未詳の第三紀礫層よりなる。

高位段丘堆積物は、日野丘陵東部の西明寺から小野にかけての尾根上に平坦面を残して分布するものと、鳥居平、奥師、日野川ダム東方、和南川南岸に分布するものがある。

前者は、西明寺付近では層厚20m以上に達し、激しく風化を受け赤褐色を帯びている。湖東流紋岩や古生層の巨礫一大礫をふくむ淘汰の悪い礫層である。

後者は、層厚5m以下の礫層で、中礫以下の古生層、湖東流紋岩類、花こう岩

の円礫一亜鉛礫よりなる。また、愛知川以北では、湖東町百済寺付近の鈴鹿山麓に分布する。ここでは、大礫まじりの湖東流紋岩類を主とする礫層でよく風化を受け、黄褐色から赤褐色を帯びている。

中段段丘堆積物は、日野丘陵の周縁に点在するほか、愛東町の園から北西方向に帯状に分布するもの、鈴鹿山麓に分布するものなどがある。

日野丘陵のものは、厚さ4 m以上の礫層からなり、上部に砂・シルト層がのっている場合が多い。礫は古生層、湖東流紋岩類、花崗岩の大礫、中礫を普通を含む円礫一亜鉛礫よりなる。ただし、愛知川以北のものは、湖東流紋岩類の礫の割合が多い。(原山他 1989)

鈴鹿山脈の高所の山稜には、湖東流紋岩類や花崗岩、古生層の巨礫、大礫を含む礫層が、やや平坦面を残して散在している。一般に礫は、湖東流紋岩類、花崗岩礫の方が古生層礫より大きく、量も多い。礫の多くは円礫一亜鉛礫で、よく風化を受けている。また、ほとんどが、礫層よりなるが、砂やシルトを挟むところもある。(西川ほか 1979 b)

本図幅では西川他(1979 b)が分布地ごとに命名した、綿向山礫層、相谷礫層、政所礫層、大荻礫層、佐目峠礫層、宮坂峠礫層のほか、今回の調査で箕川西方の尾根に類似の礫層が発見されたので、箕川礫層と命名して分布を示した。金山礫層は原山他(1989)による。

これらの礫層は、古琵琶湖層群の堆積前の河床堆積物であると考えられているが、明らかな決め手がないため時代未詳の第三紀礫層としてまとめた。

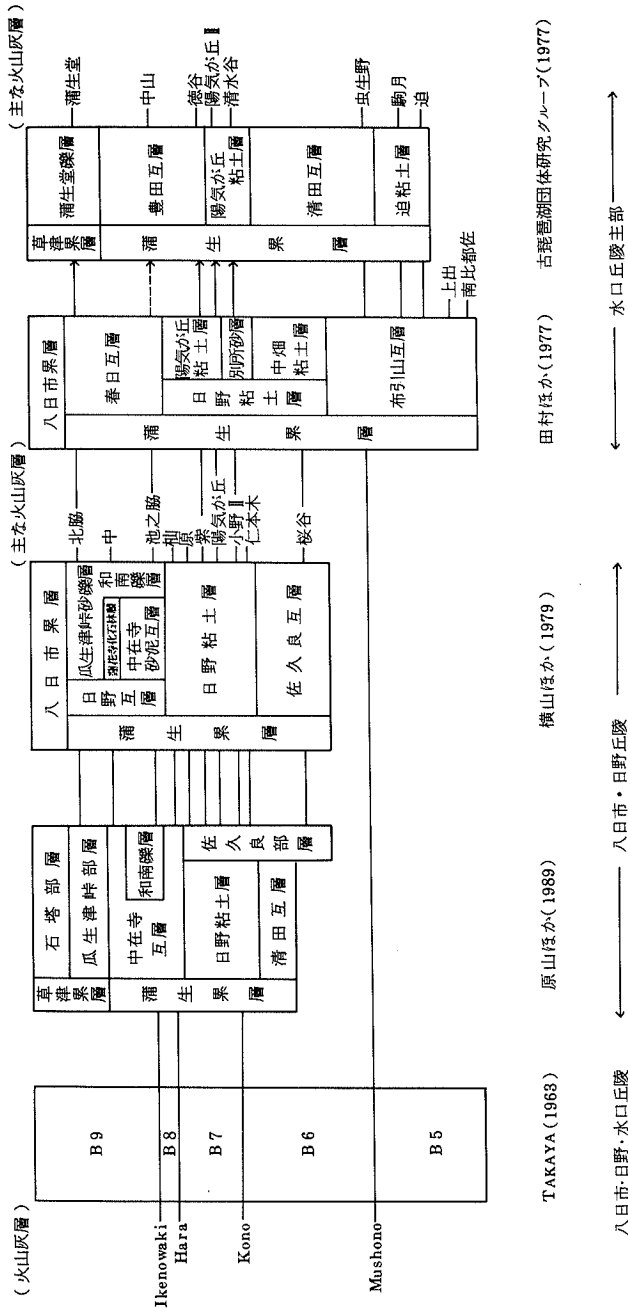
B 礫・砂・泥堆積物 (記号 smg、mgs、gms、sgm、gsm)

前述した古琵琶湖層群の浄善坊山部層、佐久良互層、和南礫層、瓜生津峠砂礫層および八日市累層がこれにあたる。

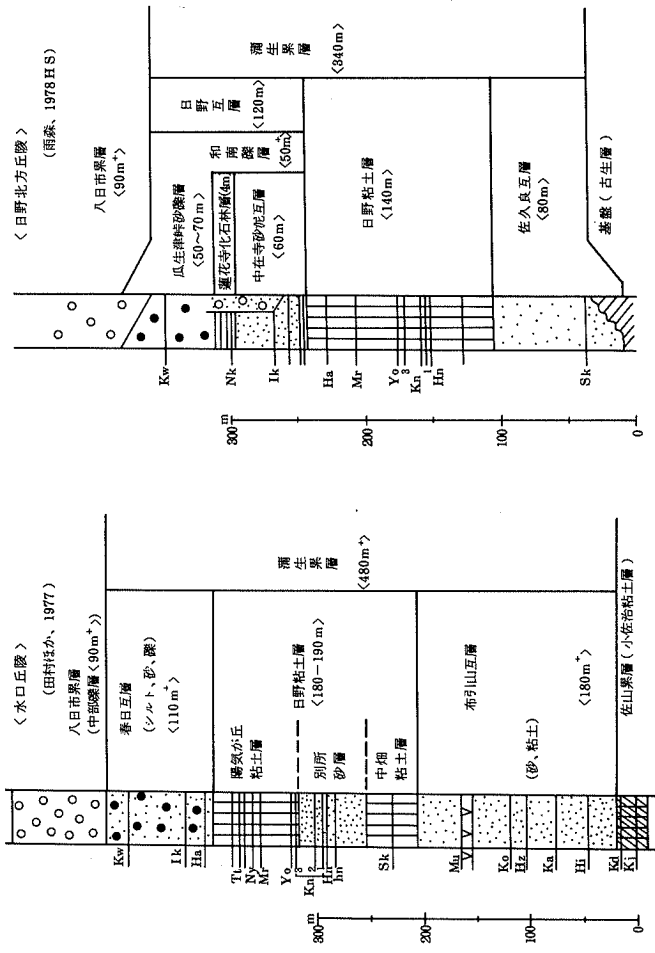
C 砂・泥堆積物 (記号 ms、sm)

前述した古琵琶湖層群の日野粘土層および中在寺砂泥互層がこれにあたる。

第二図 本図幅内の古琵琶湖層群の区分と総合柱状図



八日市・日野・水口丘陵の古琵琶湖層群の層序区分と対比
 田村ほか(1977)と古琵琶湖団体研究グループ(1977)の火山灰層名の対応は、横山ほか(1979)の記述に基づく。

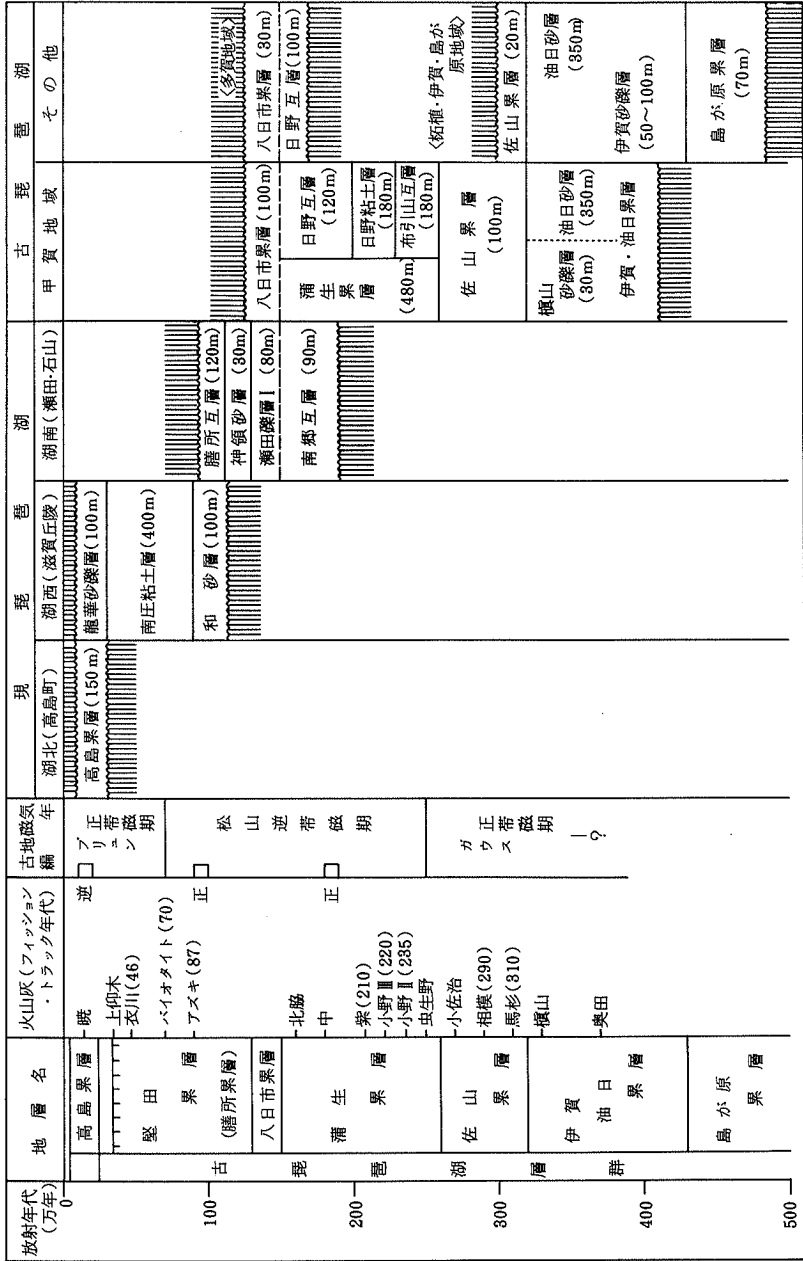


蒲生果層総合柱状図

Columnar Section of the Gamo Formation at Minakuchi and Hino Hills
 (Tanura et al. 1977 & Anemori 1987 M.S.).

(Kw: 北麓, Ik: 池ノ脇, Ha: 原, Tt: 釜田, Ny: 中山, Mr: 紫, Yo: 陶氣が丘, Kn 1~3: 小野 1~3, Hn: 日野 I, hu: 日野 II, Sk: 桜谷, Mu: 虫生野, Ko: 駒月, Hz: 迫, Hi: 南比都佐, Kd: 上出, Kj: 小佐治の各火山灰層)

第一図 古琵琶湖層群の区分



2-3 固結堆積物

本地域の固結堆積物は、砂岩および泥岩（砂岩に富む相 Sm）、泥岩および砂岩（泥岩に富む相 Ms）、及び塩基性火山岩類（R）に分けられる。原山他（1989）は、岩相上、緑色岩類-石灰岩相と、砂岩・泥岩よりなる砕屑岩相に区分したが、本図幅の（砂岩に富む相 Sm）および（泥岩に富む相 Ms）は砕屑岩相に対応する。

原山他（1989）によると、緑色岩類-石灰岩相の石灰岩からは、二畳紀を示す紡錘虫化石が産し、緑色岩類中のチャートからは二畳紀中～後期を示す放散虫化石が産する。また、砕屑砂相のチャート、石灰岩、泥岩からは、それぞれ異った年代を示す化石が得られ、チャート、石灰岩、及び緑色岩類は、異地性岩体と解釈される。異地性岩体を除く地層については、泥岩に含まれる放散虫化石の最も若い年代に基づいて、中・中部ジュラ系とされる。

（1）塩基性火山岩類（R）

永源寺佐目子谷付近や、日野町竜王山に分布するものや、藤原岳、竜ヶ岳付近に分布するものは原山他（1989）による緑色岩-石灰岩相に相当する。箕川付近に分布するものは、原山他（1989）による砕屑岩相に含まれる。玄武岩質溶岩（枕状溶岩を含む）、凝灰岩からなり、新鮮なものは黒っぽい暗緑色を呈する場合が多く、しばしば肉眼的に砂岩と見分けがつきにくい。やや風化して緑色や暗赤色を呈する。

原山他（1989）によると緑色岩類-石灰岩層は構造的に、衡上断層によって砕屑岩相に衡上し、竜ヶ岳山頂部では、クリッペとなっている。緑色岩類-石灰岩相は、主として緑色岩類（塩基性火山岩類）、石灰岩からなり、チャートを含み、わずかに泥岩を伴う。石灰岩は塊状・層状及びレンズ状に、緑色岩類中に挟まれる。チャートは一般に、灰黒色で層状またはレンズ状で、上部より下部に多い傾向がある。

（2）砂岩および泥岩に富む相（Sm）

茶屋川流域下流や箕川付近に分布する。鈴鹿花崗岩に近い部分ではホルンフェンス化や珪化を受け、固くなっている。砂岩は、中粒から細粒のものが多く、砂岩優勢な砂岩・泥岩互層のなかに、しばしばチャートが挟まれる。

原山他による砕屑岩相に含まれ、そのなかの箕川層に対応する。原山他（1989）

によると、箕川層の砂岩は、上位に細粒のものが多くなる傾向があるが、一般に無層理で、節理が発達し、一部では1 cm以下の泥岩薄層を挟むことがある。泥岩は、砂岩中に10 m以上の層厚で挟まれるか、数mのレンズ状または層状で挟まれる場合が多いが、厚さ数cm以下の砂泥細互層も見られる。チャートは厚さ数mのレンズで、砂岩中に挟まれる。泥岩からジュラ紀中期の放散虫化石が産出している。

(3) 泥岩および砂岩、もしくは泥岩に富む相(Ms)

本図幅では最も広く分布する。

図幅北部では、原山他(1989)の道ヶ谷層および、米原層に対応する。道ヶ谷層は、層理の発達した泥岩を主体とし、厚さ数mのレンズ状または薄層のチャートや厚さ3 mほどの砂岩レンズ、わずかの緑色岩を挟む。米原層は、泥岩とチャートからなり、このチャートは、厚さが100 m以上となるものや、数mの厚さで、泥岩チャートが繰り返すものが知られる。

図幅中部では、茶屋川中流や紅葉尾付近などに分布し、原山他(1989)の黄和田層の泥岩に対応する。

原山他(1989)によると黄和田層は主として泥岩からなり、上部にチャートをとめない、下部にチャートのまれな相が見られる。このチャートも100 mを越える厚層のものがある。これにはレンズ状砂岩及び石灰岩が泥岩中にわずかに挟まれ、砂岩には泥岩パッチが入るものもある。箕川付近には、緑色岩類・チャートを伴うものがある。緑色岩類は本図幅では塩基性火山岩類(R)に含めている。この緑色岩類を伴う泥岩には含礫泥岩があり、径数cm以下の緑色岩類・チャートの亜円礫や、まれに石灰岩の亜円礫を含むほか、径10cm以上、最大3 mの緑色岩類及びチャートの岩塊が入ることもあり、含礫泥岩にスランプ構造が知られている。泥岩は、ときに珪質泥岩に移化したり、しばしば無層理で節理が発達したりする。花崗岩に接する部分ではホルンフェルス化している。泥岩からはジュラ紀の放散虫化石が得られ、チャートからは三疊紀後期のコノドントが得られている。

図幅南部では原山他(1989)と対応させると、主として泥岩からなり砂岩・チャート・石灰岩を伴い武平峠・白倉谷等に広く分布する武平峠層、砂岩・泥岩からなり泥岩優勢でレンズ状チャート・石灰岩を伴う土山層、主として泥岩からなり石灰岩を挟む田村川層になる。原山他(1989)によると、武平峠層の泥岩は、一

般に層理が発達し、しばしば厚さ数 m のレンズ状または層状のチャートを挟み、まれに泥岩・チャートの細互層や、含礫泥岩がある。砂岩は中～細粒で、厚さ数 m の層状またはレンズ状で、中粒砂岩には泥岩パッチを含むものがある。石灰岩はまれである。土山層の泥岩は、細粒砂岩・シルト岩に移化することがあり、ところどころでホルンフェルス化している。石灰岩にはスカルン鉱物が生成している。隣接図幅のチャートからは三畳紀の放散虫が、また泥岩からはジュラ紀の放散虫が知られている（宮村他、1982）

（４）チャート

主としてチャートからなり泥岩・珪質泥岩を伴い複雑な小しゅう曲を反復している地層が綿向山一雨乞岳間に分布し、ここではチャートが広く分布する。その他のチャートは砂岩に富む相（Sm）や、泥岩に富む相（Ms）の地層のなかにレンズ状にはさまれることが多い。

2-4 火成岩類

（１）火山岩類

本図幅内の火山岩類は、中生代白亜紀に活動した、溶結凝灰岩を主体とする火砕流堆積物である湖東流紋岩類である。これらは火山活動の休止期をはさんで新旧2期の活動に識別される。旧期の活動では本図幅の南部の佐目子谷、北部の君ヶ畑付近に分布する佐目溶結凝灰岩（Ws）、日本コバ西部に広く分布する萱原溶結凝灰岩（Wk）がある。佐目溶結凝灰岩の分布は佐目子谷付近で舟底状～ロート状をしており、火道を満たした火砕岩であることを思わせる（西川他、1983）（西堀他、投稿中）（原山他、1989）。萱原溶結凝灰岩の活動に伴って、半深成岩である秦荘石英斑岩（H）が貫入しているが、萱原溶結凝灰岩との境界は漸移しており、両者が一連の活動でできたことが指摘されている（西川他、1983）。旧期の活動のあと、火山活動の休止期があり、深谷層が堆積した。この地層は暗灰色凝灰質泥岩であるがこの地層は、地層としての露出でなく、深谷岩屑なだれ堆積物（原山他、1989）の中の礫として含まれる。図幅の八尾山火砕岩角礫岩層（F）は、ほぼこの深谷岩屑なだれ堆積物に相当する。

新期の活動には本図幅北方に分布する八尾山火砕岩（Y）と、火砕岩脈として杠葉尾（ゆずりお）付近日本コバ付近、甲津畑北東などに分布する杠葉尾火砕岩

(Py)がある。八尾山火砕岩は下位より、角礫岩層(原山(1989)では深谷岩屑なだれ堆積物に相当)、溶結凝灰岩層、軽石凝灰岩層からなる。新期の活動に伴って犬上花崗斑岩(IG)が貫入している。紅葉尾火砕岩は犬上花崗斑岩と密接な関係をもつ火砕岩脈である(西堀他、投稿中)(原山他、1989)。犬上花崗斑岩は、本図幅で二重の円弧の形に分布し、西側が、段階的に落ち込んだ構造を示す。そしてこれは前述の新旧2回の火成活動の結果直径25~30kmのコールドロン(湖東コールドロン)の形成があり、その割れ目を満たしたものが犬上花崗斑岩であることを示す(西川他1988)。

佐目溶結凝灰岩(Ws)は灰黒色~灰色の変成をうけた堅くて緻密な流紋岩~流紋デイサイト質溶結凝灰岩で、強く扁平化したやや明色である緑色をした本質レンズを含むことが多く、斑晶として1~3mmの石英、カリ長石、斜長石、黒雲母、角閃石を含む。

萱原溶結凝灰岩(Wk)は灰緑色強溶結の流紋デイサイト溶結凝灰岩であり、斑晶は破片状で径1~5mm程度の石英、斜長石、カリ長石、黒雲母でありまれに角閃石、カンラン石を含む。

秦荘石英斑岩(H)は暗緑色~灰緑色の岩石で、多くは隠微晶質~微晶質の石基中に最大約10mm程の斜長石、石英、カリ長石、角閃石、黒雲母、輝石などの斑晶が散在する。しばしば流理構造が観察される。

八尾山火砕岩(Y)の溶結凝灰岩は暗灰色強溶結の流紋岩凝灰岩で、本質レンズは灰緑色で扁平化している。異質岩片として黒色泥岩片を多く含む。斑晶は0.5~1mmの石英、カリ長石、斜長石、角閃石、黒雲母で、斑晶のカリ長石がピンク色を帯びる。軽石凝灰岩は灰色~灰緑色~暗灰色微溶結の岩石で比較的大型の軽石、大型の異質岩片を多量に含む。

犬上花崗斑岩(IG)は灰白色~緑灰色の石基中に斑晶として0.5~10mmの石英、カリ長石、斜長石と少量の角閃石、黒雲母などを含む。花崗岩的な部分や斑状花崗閃緑岩の部分もあり岩相変化に富む。

紅葉尾火砕岩(Py)は優黒色基質の火砕岩、灰緑色溶結凝灰岩からなる。黒色の火砕岩中には中生層や犬上花崗斑岩の岩片を多量に含む。犬上花崗斑岩と密接な関係をもって産し、同時期、同一マグマの産物と考えられている(西堀他、投稿中)(原山他1989)。

(2) 深成岩類

鈴鹿山脈を中心に広く分布するのが鈴鹿花崗岩(G)である。中～細粒斑状角閃石含有黒雲母花崗岩、中～粗粒弱斑状黒雲母花崗岩、細～中粒等粒状黒雲母花崗岩の順に地形的高所から低所に向かって分布が見られる(原山他 1989)。

紅葉尾南方の須谷川から風越谷にかけて、風越谷花崗閃緑斑岩(KG)が分布する。西川他(1988)では犬上花崗斑岩に含められたが、本図幅では、原山他(1989)に従った。原山他(1989)は鈴鹿花崗岩に熱変成を受けた岩体として記載している。斑状組織を示す角閃石雲母花崗閃緑斑岩である。

また原山他(1989)は、鈴鹿花崗岩を貫く岩株状の岩相変化に富む岩体として谷尻谷斑状花崗岩(TG)を記載した。本図幅でもそれを引用した。黒雲母石英斑岩、黒雲母花崗斑岩、斑状角閃石含有黒雲母花崗岩などの岩相をもつ。

日野町小野南方には石子山花崗岩(Gi)がみられ、アプライト質黒雲母花崗岩で、周囲の溶結凝灰岩層に熱変成作用を与えている(原山他、1989)。

2-5 変成岩類

鈴鹿花崗岩の周辺では中・古生層が、熱変成を受けてホルンフェルスが形成されている。鈴鹿花崗岩と中・古生層の境界は紅葉尾から武平峠にかけての岩体西側の貫入面はほぼ垂直であり(原山他、1989)、ホルンフェルスの幅はそう広がらないが、岩体の北縁の竜ヶ岳、古語録谷方面では約30度と北側へ緩く傾斜しているため(原山他、1989)、ホルンフェルスの幅は広い。接触部から約500～1000mの範囲の泥質岩に董青石が、更に約1.5kmの範囲で黒雲母を生じている(原山他、1989)。

佐目溶結凝灰岩は佐目子谷付近で、犬上花崗斑岩に熱変成を受けて、再結晶して堅くなっている。綿向山西麓では、石灰岩にスカルン鉱物を生じている。

2-6 鉱床

以下は原山他(1989)より引用する。

(1) 銅・鉛・亜鉛・硫化鉄鉱床

鈴鹿花崗岩の周辺に分布する中・古生界中にはさまざまな規模のスカルンや鉱脈型鉱床が多数分布している。このうち稼行された鉱床は鉱脈型鉱床で、茨川蛇

谷鉾山（茶屋川支流蛇谷）、政所鉾山（永源寺町政所）、ジュールミチ谷上流旧坑（神崎川支流）、大倉谷旧坑（神崎川支流）、サブクラ谷上流旧坑（神崎川谷尻谷上流）、御池鉾山（神崎川支流）、杉峠鉾山、向山鉾山（渋川上流）、滝ヶ坂鉾山（土山町）、稲ヶ谷鉾山（土山町）、白倉谷鉾山（土山町）、などがあったが、現在は、稼行していない。

（２）マンガン鉾床

中・古生界の主としてチャートを母岩にした鉾床であるが、戦時中か戦後の一時期に稼行されたのみで現在は廃山となっている。永源鉾山（永源寺町）、朝日谷鉾山（永源寺町蛭谷）、平子鉾山（日野町平子）、藤富鉾山（日野町）などがあった。

（３）天然ガス

近江盆地の各地では古くから天然ガスの兆候が知られてきたが、愛東町百済寺にある近江温泉の深井戸からも N_2 を主体とする不燃性水溶性ガスの存在が調査されている。

（４）スカルン鉾物

佐目子谷愛知川右岸（永源寺町）の緑色岩中の石灰岩体がスカルン化した結果、多数の鉾物が形成されている。磯部他（1976）によりベスブ石、輝石類、ざくろ石、硫化鉾物などのほか、二次的に生成した沸石類を含めて18種類の鉾物が産することが、報告されている。

綿向山西麓（日野町）にレンズ状の石灰岩がスカルン化して、珪灰石、ベスブ石、ヘデンベルグ輝石を産する。天然記念物に指定されている。

（５）温 泉

近江温泉は500 m新生界とその下の湖東流紋岩を掘削したボーリングから揚水（約300 K l/1日）している。温泉は約30℃。

参考文献・引用文献

- 磯部 敏夫・岡田 久・北岸 武彦・高橋 政宏(1976)
滋賀県神崎郡永源寺町 佐目子谷の鉱物について
京都地学会誌No. 29 P 1-9
- 西川 一雄・西堀 剛・小早川 隆・但馬 達雄・辻 一信・佐藤 義成
(1979 a) 湖東流紋岩類 滋賀県の自然(総合学術調査研究報告)
滋賀県自然保護財団 P 229-244
- 西川 一雄・西堀 剛・小早川 隆・但馬 達雄・横山 卓雄(1979 b)
時代未詳の第三紀礫層 - 鈴鹿山脈高所及び山麓に分布する先古琵琶
湖層群と考えられる礫層について
滋賀県の自然 滋賀県自然保護財団 P 301-308
- 西川 一雄・西堀 剛・小早川 隆・但馬 達雄・上嶋 正人・三村 弘二・
片田 正人(1983) 湖東流紋岩類およびその火成活動
岩鉱 77 P 51-64
- 西堀 剛・西川 一雄・小早川 隆・但馬 達雄・岨中 貴洋(投稿中)
湖東流紋岩類 滋賀県の自然(続) 滋賀県自然保護財団
- 原山 智・宮村 学・吉田 史郎・三村 弘二・栗本 史雄(1989)
地域地質研究報告(5万分の1図幅)御在所山地の地質、地質調査
所
- 町田 洋・新井 房夫(1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ
アカホヤ火山灰、第四紀研究、17、P 143-145
- Miki, S(1956) Remains of *Pinus Koraiensis* Set Z and
Associated Remains in Japan
Bot. Mag. Jap., Vol 69 P 448-454
- 三村 弘二・片田 正人・金谷 弘(1976) 琵琶湖南東八尾山地の湖東流
紋岩類の火成作用 岩鉱 71 327-338
- 宮村 学・三村 弘二・横山 卓雄(1976) 地域地質研究報告(5万分の1
図幅)彦根東部地域の地質、地質調査所
- 宮村 学・吉田 史郎・山田 直利・佐藤 岱生・寒川 旭(1981)
亀山地域の地質 地域地質研究報告(5万分の1図幅)
地質調査所

横山 卓雄・松岡長一郎・田村 幹夫・雨森 清(1979)

古琵琶湖層群、滋賀県の自然、滋賀県自然保護財団 P 309-390

Ⅲ 土 壤 図

1 林地土壌

1-1 林地土壌概説

本図幅地域における林地土壌は大別すると、鈴鹿山脈とその西部に発達した鈴鹿山麓丘陵からなっている。

鈴鹿山脈の土壌

この地域は県境に藤原岳、竜ヶ岳、釈迦ヶ岳、御在所山などの標高1100～1200mの諸峰と、それより琵琶湖側へ除々に低下する山地から成りたっている。

林地土壌は大部分褐色森林土からなっている。全般的に尾根筋にはB型土壌、谷筋にはB_D型土壌、山腹斜面にはB_D(d)型土壌が出現している。また一部谷筋には山腹斜面下部から沢沿いにかけてB_E型土壌が出現している。褐色森林土以外の土壌としては黒色土、未熟土、受蝕土が一部見受けられる。

母材となる地質は、花崗岩類、湖東流紋岩類、溶結凝灰岩層などの火成岩や塩基性火山岩、チャート、砂岩および泥岩などの固結堆積物からなっている。

植生は、谷筋から中腹にかけてスギ、ヒノキの人工林があるほかクヌギ、コナラ、ヤブツバキなどの天然広葉樹が広く分布している。また、標高の高い地域ではリョウブやドウダンツツジなどのツツジ類、ササ類が生育している。

鈴鹿山麓丘陵の土壌

この地域は鈴鹿山脈の西部で、近江盆地との間に隆起によって発達した丘陵や台地で多賀丘陵、八日市丘陵、日野丘陵などから成っている。地形は標高200～400mのゆるやかな起伏となっている。

この地域は砂、礫、粘土を主とする古琵琶湖層群などからなっており、あまり土壌化の認められない生産力の低い未熟土が広く分布しており、一部地域に乾性の褐色森林土であるB_A、B_B型土壌やB_D(d)型土壌が出現している。

植生はアカマツ、コナラ、ヒサカキ、ネジキなどがみられる。

林地土壌の概要は以上のとおりである。本土壌図の作成にあたっては「林野土壌の分類1975」（農林水産省林業試験場土壌部、林試研報、No.280、P1～P28、1976）に基いて分類し、類似する土壌型を一つの統群にまとめた。

本図幅に分布する林地土壌は表1のとおりであり、土壌群、土壌亜群、土壌統群に区分した。

1-2 林地土壌細説

1 褐色森林土

褐色森林土は、多雨気候の温暖帯の代表的な山地土壌であり、本図幅内にも広く分布している。

この土壌は、(A₀)-A-B-C層を伴い、表層部は構造が発達した黒褐色を呈し、褐色のB層へ移行する断面形態の土壌であり、微地形の水分環境の違い等による層位の発達程度や、土壌構造の相違により、この地域では次の土壌統群に区分される。

〔乾性褐色森林土(細粒状構造型 B_A)〕

この土壌は、南あるいは西に面した、日当りの良い細い尾根の急傾斜地に出現しており、乾燥のため落葉、落枝の分解が遅く、L層(落葉層)、F層(腐葉層)、H層(腐植層)が厚く、A層(表層)の色調も一般に淡く、B層(下層)との境界は明瞭である。また、表層土は細粒状構造でかたく、種々の養分も欠乏しており、酸性の強い土壌である。

植生は、アカマツ、ツツジ類、アセビ、リョウブ等である。

スギ、ヒノキ等の人工植栽には不適であり、森林の取扱いを誤ると荒廃地となる。

〔乾性褐色森林土(粒状、堅果状構造型 B_B)〕

この土壌は、本図幅のほぼ全域の尾根や、山腹の斜面上部に広く分布している。B_A型土壌と同じくF-H層はよく発達し、A₀層の堆積は明瞭である。H層の下には粒状または、堅果状構造の発達したA層が10cm程度あり、B層との境界は判然としている。

植生はアカマツやイヌブナ、コナラ、ミツバツツジ、シロモジなどが生育している。

ヒノキ、アカマツ等の造林ができるが、あまりよい成長は期待できない。

〔適潤性褐色森林土(偏乾亜型 B_D(d))〕

この土壌はB_B型土壌とB_D型土壌の中間、すなわち山腹斜面に広く分布して

いる。

形態的な特徴は B_D 型土壌と類似しているが、多少発達した F-H 層を伴い、A 層は標準的な B_D 型土壌よりやや浅い場合が多い。また、A 層上部には粒状構造のほか、団粒状構造もみられるが、下部には堅果状構造が発達しており、B_D 型土壌より多少乾性の特徴を示している。

植生はスギ、ヒノキの人工林のほか、クヌギ、コナラ、ヒサカキ等の広葉樹が生育している。

スギは B_D 型土壌に比べてかなり成長が劣る。

〔適潤性褐色森林土 B_D〕

この土壌は褐色森林土の代表的な土壌であり、谷筋から山腹斜面の中腹にかけて分布している。

A 層上部は腐食に富み、よく発達した団粒状構造を伴っているが、下部にはしばしば塊状構造がみられるほか、B 層との間には、A 層と B 層の間的な特徴を持った A-B 層がみられる。

植生はスギの人工林が大部分を占めている。他にはヤマアジサイ、アオキなどの広葉樹が生育している。

種々の有用樹種の造林が可能で、かなりの成長が期待できる。

〔弱湿性褐色森林土 B_E〕

山腹斜面下部から沢沿いにかけて、水分の供給は豊富であるが過湿な条件にならない場所に出現する。

形態的な特徴としては、斜面地形では A₀ 層は発達せず、A 層は腐植に富み、すこぶる厚く、団粒状構造が発達し、やや暗灰色の環元色の色調を帯びた褐色の B 層へ漸変する。B 層は特別の構造は見られない。

植生はスギの人工林のほか両面シダが生育している。

2 黒色土

この土壌は火山放出物を母材としており、形態的な特徴としては厚い黒色の A 層を有し、B 層との境は明瞭である。色相は 7.5 ないし 10Y R $\frac{1}{2}$ 程度である。全層を通じてカベ状構造の場合が多く、堅密な土壌となっている。

本図幅では雨乞岳の緩斜地形に適潤性黒色土 (Bl_o(d)) が出現している。

植生はリョウブ、ツツジ類、ササ類などが生育している。

3 未熟土

土壌生成過程の時間が短いか、または受蝕のためにA層、B層などの層位を完備していない土壌で、その原因によって次の二つの亜群に区分する。

〔未熟土 Im〕

母材の堆積が比較的新しく、層位の分化がまだ不明りょう、または微弱なもの。比較的新しい氾濫、土石流、泥流などによる堆積からなる。

このうち主に完新世の河川堆積物よるものを崩積性未熟土 Im-1とし、主に段丘堆積物よりなるものを残積性未熟土 Im-2とした。

植生はコナラ、タカノツメ、エゴノキ、ススキなどが生育している。

〔受蝕土 Er〕

主として表面侵食によって土層の一部を欠除したもので、一般的に物理性が悪く、土壌の改良は困難で、森林の更新保育はむずかしい。

参 考 文 献

滋賀県立自然保護財団（1979）：滋賀の自然

国立林業試験場（1961）：林野土壌とそのしらべ方

国立林業試験場土壌部（1982）：森林土壌の調べ方とその性質

国土庁土地局（1975）：縮尺20万分の1土地分類図（表層地質図）、滋賀県

国土庁土地局（1975）：縮尺20万分の1土地分類図（土壌図）、滋賀県

昭和63年度土地分類基本調査

調査者 滋賀県森林センター 林業専門技術員 和田信雄

表一 昭和63年度土地分類基本調査「御在所山」図幅林地土壤統区分表

土 壤 群	亜 群	土 壤 統 群	記 号	分 布 地 帯 及 び 出 現 地 形	地 質 母 材
		乾性褐色森林土 (細粒状構造型)	BA	鈴鹿山麓丘陵の南あるいは西に面した日当りの良い尾根付近の急傾斜地に出現	礫・砂
		乾性褐色森林土 (粒状・堅果状構造型)	BB	本図幅のほぼ全域の緩斜な尾根や山腹の斜面上部に出現	花崗岩・塩基性火山岩 粘板岩・粘結凝灰岩
		適潤性褐色森林土 (偏乾型)	BD(d)	本図幅のほぼ全域の山腹斜面の中腹部から下部にかけて出現	〃
		適潤性褐色森林土	BD	鈴鹿山脈地域の山腹斜面の中腹部から下部および沢沿いにかけて出現	〃
		弱湿性褐色森林土	BE	鈴鹿山脈地域の山腹斜面下部から沢沿いにかけて出現	粘板岩 塩基性火山岩
黒色土	黒色土	適潤性黒色土 (偏乾型)	B1D(d)	雨乞岳付近の緩斜地形に出現	犬上花崗斑岩 塩基性火山岩
		崩積性未熟土	Im-1	河川沿いに出現	礫・砂
木	木	残積性未熟土	Im-2	鈴鹿山麓丘陵に出現	礫・砂
		受蝕土	Er	本図幅のほぼ全域に点在	礫・砂 花崗岩・塩基性火山岩 粘板岩・粘結凝灰岩

2 農地土壌

土壌の区分

農地土壌の分類については、地力保全基本調査の結果をもとに、これに最近の調査結果および試穿調査を加え、都道府県土地分類基本調査作業規程に基づいて土壌統区分を行った。土壌統は全国统一土壌統で区分し、図幅には土壌統番号で示した。土壌統の区分は断面形態、母材、堆積様式の異同により定めることになっている。次表には、この図幅内の地域に分布する土壌統について分類上の基準を示した。

各項目別に基準を説明すると以下のとおりである。

- (1) 腐植：腐植層なしは腐植含量が5%以下、腐植層は腐植含量がおおむね5～10%、多腐植層は腐植含量がおおむね10%以上である。
- (2) 土色：土層1mのうち、作土下土層（おおむね25～60cm）の湿土の基色の色で区分する。
- (3) 礫層、砂礫層：いずれも径2mm以上の未風化または半風化礫が断面の面積割合で20%以上を占める土層が20cm以上あること。

礫層は細土の土性が壤質より細かく、砂礫層は細土の土性が砂質の層をいう。

- (4) 斑紋結核：斑紋・結核は鉄、マンガンの酸化沈積物で、「斑紋結核あり」とは断面調査において糸根状斑、膜状斑等で「含む」以上の場合をいい、管状斑、結核では「あり」以上の含量の場合をいう。

未風化ないし腐朽礫にみられる鉄またはマンガンの酸化被覆物はここにいう斑紋結核には含めない。

- (5) 土性：原則として作土または第一層（表面下おおむね25cm以内）を除いた次表層位（おおむね25～60cm）の土性について次のように区分する。

強粘質；HC、LiC、SiC、SC（粘土含量25%以上）

粘質；CL、SCL、SiCL（粘土含量15%以上25%未満）

壤質；SL、L、SiL、FSL（粘土含量15%未満で砂の含量が85%未満）

砂；LS、S（砂の含量が85%以上）

- (6) グライ層：グライ層の有無および出現位置によって次のように区分する。

表中のK₁は全層または作土を除くほぼ全層がグライ層、K₂は上層50cm以内に厚さ20cm以上がグライ層、K₃とはここではグライ層は30cm以下80cm以内とし

た。K₄ はグライ層なし、あっても80cm以下を示す。

(7) 構造：発達程度中以上の構造をもつ土壌は構造ありとして区分することがある。

(8) 泥炭層および黒泥層：各層の有無および出現位置はグライ層の区分と同一である。なお、本調査域では出現していない。

(9) 堆積様式：

残積；変成岩、固結火成岩、および第三紀またはそれ以前の堆積岩を母材とし、その場で生成したもの。

洪積世堆積；洪積世に堆積したと考えられる堆積物（ただし非固結火成岩は「風積」に含める）を母材として生成したもの。ただし、非固結火成岩が洪積世に水の営力により再堆積されたものでも、水の作用が土壌に及ぼした影響が小さく、非固結火成岩に由来する土壌（黒ボク土）としての特徴を保持している場合はその堆積様式は「風積」とする。

崩積；沖積世に崩積したと考えられる堆積物を母材として生成したものをいう。

水積；沖積世に主として水の営力により堆積したもので、非固結火成岩が水により再堆積したものも含む。

風積；火山性と非火山性に区分する。

土壌番号	土壌統	腐植	土色	深層・砂礫層 盤層・岩盤	斑紋・結核	土性	構造	泥炭層	黒炭層	グライ層	反応	母材	堆積様式	主な 土地利用
03 黒ボク土														
表面多腐植質黒ボク土														
0320	みや だい 平	表面多腐植層	—	0～30cm以下	なし	—	—	なし	なし	なし	—	非固結火成岩 非固結堆積岩	崩・洪・水積	畑
06 褐色森林土														
深層褐色森林土														
0620	いづ 泉	表面腐植層	黄褐	30～60cm以下 盤	—	強粘～粘	—	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	崩	畑
07 灰色地土														
礫質灰色地土														
0712	な 垣	表面腐植層なし	灰～灰褐	30～60cm以下	斑紋あり	強粘～粘	—	なし	なし	なし	—	—	洪積世堆積 残積(崩積)	畑
04 深黒ボク土														
厚層腐植質多湿黒ボク土														
0410	たか 高	全層腐植層	—	なし	あり	塵(砂)	—	なし	なし	なし	—	非固結火成岩	水積(崩積)	水田
表面腐植質多湿黒ボク土														
0429	あな の 金屋谷	表面腐植層	一草～黄褐	なし	あり	強粘～粘	—	なし	なし	なし	—	非固結火成岩 非固結堆積岩	水積	水田
0432	お の 松木沢	"	—	30～60cm以下	"	塵(砂)	—	"	"	"	—	"	"	"
0433	と ま 時 産	"	—	0～30cm以下	"	—	—	"	"	"	—	"	"	"
0435	お お 大田和	"	—	なし	"	強粘～粘	—	(1.3)	J3	"	—	非固結火成岩 崩物遺体	水 果	"
0436	お お 吉岡	"	—	"	"	塵(砂)	—	"	"	"	—	"	"	"
12 褐色低地土														
深層褐色低地土、斑紋なし														
1205	た た 窪	表面腐植層なし	黄褐	30～60cm以下	なし	強粘～粘	—	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水積	水田
細粒褐色低地土、斑紋あり														

土 壤 統 計 号	土 壤 統 計 号	腐 植 質	土 色	礫 質・砂 礫 質 礫 質・岩 盤	斑 紋・結 核	土 性	構 造	肥 沃 層	黒 泥 層	グ ラ イ 層	反 応	母 材	堆 積 様 式	主 要 土 地 利 用
1208	中 島	表面腐植層なし	黄 褐	なし	斑紋あり Mn結核なし	強 粘	—	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水	水田
1210	電 万	〃	〃	〃	〃	粘	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
中粗粒褐色低地土、斑紋あり														
1212	森 野	表面腐植層なし	黄 褐	なし	斑紋あり Mn結核なし	壤	—	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水	水田
1213	三 河 内	〃	〃	〃	斑紋あり Mn結核あり	〃	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
1214	長 崎	〃	〃	〃	斑紋あり	砂	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
礫質褐色低地土、斑紋あり														
1215	大 沢	表面腐植層なし	黄 褐	30~60cm以下	斑紋あり	強粘~粘	—	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水	水田
1216	や 八 口	〃	〃	〃	〃	壤~砂	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
1217	い 井 尻 野	〃	〃	0~30cm以下	〃	—	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
13 灰色低地土														
細粒灰色低地土、灰色系														
1302	四 倉	表面腐植層なし	灰	なし	斑紋あり Mn結核なし	強 粘	あり	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水	水田
1303	佐 賀	〃	〃	〃	斑紋あり Mn結核あり	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
1305	鴨 島	〃	〃	〃	斑紋あり Mn結核なし	粘	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
1306	た 田 宝	〃	〃	〃	斑紋あり Mn結核あり	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
中粗粒灰色低地土、灰色系														
1307	か 茂	表面腐植層なし	灰	なし	斑紋あり Mn結核なし	壤	—	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水	水田

土壌番号	土壌統名	腐植	土色	礫層・砂礫層・岩盤層	斑紋・結核・Mn結核あり	土性	構造	泥炭層	黒炭層	クワイ層	反応	母材	堆積様式	主な土地利用
1308	落武	表面腐植層なし	灰	なし	斑紋あり Mn結核あり	壤	—	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水積	水田
礫質灰色低地土、灰色系														
1310	久世田	表面腐植層なし	灰	30~60cm以下	斑紋あり	強粘~粘	—	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水積	水田
1311	かっこのま 追子野木	〃	〃	〃	〃	壤~砂	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
1312	くさ 国領	〃	〃	0~30cm以下	〃	—	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
細粒灰色低地土、灰褐色系														
1315	かほ 金田	表面腐植層なし	灰褐色	なし	斑紋あり Mn結核なし	粘	あり (なし)	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水積	水田
中粗粒灰色低地土、灰褐色系														
1317	やす 安米	表面腐植層なし	灰褐色	なし	斑紋あり Mn結核なし	壤	あり (なし)	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水積	水田
1318	ざんづり 普通寺	〃	〃	〃	斑紋あり Mn結核あり	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
礫質灰色低地土、灰褐色系														
1321	まつ 松本	表面腐植層なし	灰褐色	30~60cm以下	斑紋あり	強粘~粘	—	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水積	水田
1322	か 山	〃	〃	0~30cm以下	〃	—	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃
灰色低地土、下層黒ボク														
1324	い 野	下層腐植層 火山灰層	灰~灰褐色 黒~黒褐色	なし	斑紋あり	粘	—	なし	なし	なし	—	非固結堆積岩	水積	水田
1325	たか 高崎	〃	〃	〃	〃	壤	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃

土環 番号	土環 統	腐	植	土 色	礫 層・砂 礫層・ 礫層・ 岩盤	斑 紋・結 核	土 性	構 造	泥炭 層	肥田 層	グラ イ 層	反 芯	母 材	堆 積 様 式	主 土 地 利 用
14 グライ土 細粒強グライ土															
1402	な 田	かわ 川	表面腐植層なし	青灰	なし	30cm以下あり	強粘	—	なし	なし	K ₁	—	非固結堆積岩	水	水田
1404	ひ 東	うら 前	"	"	"	"	粘	—	"	"	"	—	"	"	"
中粗粒強グライ土															
1406	た 瀬	お 尾	表面腐植層なし	青灰	なし	30cm以下あり	緩	—	なし	なし	K ₁	—	非固結堆積岩	水	水田
強質強グライ土															
1410	た 深	ぎ 沢	表面腐植層なし	青灰	30~60cm以下	30cm以下あり	強粘~粘	—	なし	なし	K ₁	—	非固結堆積岩	水	水田
1412	ひ 水	か 上	"	"	"	"	緩~砂	—	"	"	"	—	"	"	"
1414	お 大	す 割	"	"	0~30cm以下	"	—	—	"	"	"	—	"	"	"
細粒グライ土															
1416	た 種	の 野	表面腐植層なし	灰色/青灰	なし	斑紋あり Mn結核なし	強粘	あり	なし	なし	K ₃	—	非固結堆積岩	水	水田
1419	た 成	す 津	"	"	"	"	粘	"	"	"	"	—	"	"	"
中粗粒グライ土															
1421	た 新	や 山	表面腐植層なし	灰色/青灰	なし	斑紋あり Mn結核なし	緩	なし	なし	なし	K ₃	—	非固結堆積岩	水	水田
1423	や 八	た 橋	"	"	"	"	砂	—	"	"	"	—	"	"	"
グライ土、下層黒ボク															
1425	た 高	た 畑	下層腐植層 火山灰層	青灰/無黒炭	なし	あり (なし)	粘	—	なし	なし	K ₂	—	非固結堆積岩 非固結火成岩	水	水田

農地土壌の分布概況

本図幅内に分布する土壌統群および各種土壌統について、大凡その面積順位にその分布をみると以下のようである。

(1) 細粒褐色低地土、斑紋あり

湖東町大沢を中心に南北4 km東西1 kmにまたがる地域、愛東町中戸から青山、小倉の延長線北側の河岸段丘上に中島統が分布する。これよりも分布域はやや狭くなるが、秦荘町蚊野外と蚊野北東部、湖東町湯屋南東部、日野町鳥井平新田北部、同町西大路北部、同町音羽北部、同町八丁野北部また同町奥之池東部に点在している。

これらの諸地域は湖東町の平坦部を中心に分布しているが、日野町の場合、丘陵谷間の小河川に沿った谷津田およびその開折地に分布している点特徴的である。

(2) 礫質灰色低地土、灰色系

湖東町では上述の細粒褐色低地土（中島統）に隣接して国領統が広く分布しており、加領川、宇曾川にはさまれる形で中島統の東部に分布している。

同様に愛東町でも加領川、愛知川にはさまれる形で中島統に隣接しているが、この場合山脚寄りに北北西の方向に分布している。ただし、愛東町では礫質灰色低地土（追子野木統、国領統）と中島統との間に細粒灰色低地土の鴨島統、宝田統がサンドイッチ状に北北西の方向に狭くはさまれた形で分布している。

なお、愛知川および和南川によって堆積されて生成した追子野木統、国領統の分布は両河川に平行しており、その分布域も広い。また、両統は日野町丘陵地帯での河川上流沿いにも少面積で分布している。

(3) 黒ボク土

河川によって再堆積したのことが多いと考えられる。特に、愛知川左岸部の青野から山上新田にかけての分布が広い。また、同上流部にも少域ながら分布する。この他、湖東町、愛東町で加領川、宇曾川沿いに4カ所分布している。

永源寺町池之脇南西部の小丘陵台地上の茶園、飼料畑には表層多腐植質黒ボク土が分布し、また同台地東側脚部の水田には同一黒ボク土が水積、埋没したと考えられる灰色低地土、下層黒ボク（高崎統）が分布している。同種土壌統は永源寺町市原野西部にも分布している。

日野町での黒ボク土の分布はないが、灰色低地土、下層黒ボク（高崎統）が日

野川右岸西大路を中心に東西に細長く分布している。

(4) グライ土

強グライ土の分布は、永源寺町新出を中心に丘陵地の山脚部、同町山田の和南川と愛知川合流地帯、八日市市今代の愛知川左岸部、秦荘町香之庄に分布している。日野町では丘陵地帯の谷津田に多く分布する。

(5) 細粒灰色低地土、灰色系

既に(2)で述べたとおり、鴨島統、宝田統は礫質灰色低地土の周縁部に分布しているが(愛東町)、これ以外に秦荘町上之郷、永源寺町一式および日野町佐久良川沿岸等にも帯状に少面積で分布している。

なお、中粗粒質の加茂統、清武統も本土壌統群の周縁部に分布している場合が多い。

(6) その他

礫質灰色低地土、灰褐色系(松本統、柏山統)が八日市市如来、池田を中心に愛知川兩岸の地域で分布している。礫質褐色森林土(泉南統)は永源寺町政所の茶園に分布している。秦荘町香之庄にはグライ土、下層黒ボクが小域ながら分布している。

礫質褐色低地土、斑紋あり(大沢統)が(1)で述べた中島統と(2)で述べた国領統に比較的近接する地域で分布している。

水田の土壌統

① 多湿黒ボク土

(厚層腐植質多湿黒ボク土)

0410 ^{たかまつ}高松統：表層、次表層位とも腐植に富み(5-10%)、斑紋あり。土性は壤質。永源寺町能原に分布する。堆積様式は水積(以下、特に記載しない限り、水積を略記)。

(表層腐植質多湿黒ボク土)

0429 ^{かなやだに}金屋谷統：表層に腐植を5-10%含み、25cm以下は斑紋あり、黄褐強粘質。湖東町平柳に分布するが、面積は少ない。

0432 ^{ひのきざわ}桧木沢統：表層に腐植5-10%含み、礫に富む。斑紋あり。45cm以下は礫に頗る富む砂礫層。水源寺町高野、愛東町下山に分布する。

0433 ^{ときにお}時庭統：表層に腐植5-10%を含み、次表層(15-30cm)に斑紋あり、礫を含む。30cm以下は黄褐の円、角礫に頗る富む砂礫層。永源寺町山上新田を中心に広く分布する。

0435 ^{おおたわ}大田和統：表層に腐植5-10%を含み、次表層位以下は斑紋あり、黄褐の埴壤土。愛東町池之尻に少面積で分布する。

0436 ^{よしおか}吉岡統：表層に腐植5-10%を含み、次表層位以下は斑紋あり、黄褐、壤土。湖東町平柳に分布する。

② 褐色低地土

(礫質褐色低地土、斑紋なし)

1205 ^{たきざわ}滝沢統：表層腐植層なし。次表層位は円礫を含む黄褐粘質。45cm以下は礫に頗る富む。永源寺町杠葉尾に分布する。

(細粒褐色低地土、斑紋あり)

1208 ^{なかじま}中島統：表層腐植層なし。次表層位下は黄褐の強粘。斑紋含む。湖東町、愛東町に広範囲に分布する。

1210 ^{じょうまん}常万統：表層腐植層なし。表層、次表層位とも斑紋あり、腐植5%以下の粘質。50cm以下礫を含む。秦荘町、日野町に少面積で散在する。

(中粗粒褐色低地土、斑紋あり)

1212 ^{おぎの}荻野統：表層腐植5%以下。次表層は斑紋あり、黄褐、壤質。85cm以下円礫に富む。永源寺町相谷に分布する。

1213 ^{みかわち}三河内統：表層腐植 5%以下。次表層位は黄褐、斑紋含む壤質。永源寺町相谷に分布する。

1214 ^{ながさき}長崎統：表層および40cmまでの次表層位の腐植 5%以下で斑紋含む。40cm以下礫に富む黄褐の砂層。八日市市寺村新田に極く少面積で分布する。

（礫質褐色低地土、斑紋あり）

1215 ^{おおさわ}大沢統：表層腐植 5%以下。次表層位斑紋あり。黄褐、強粘質。55cm以下円礫に頗る富む。湖東町、愛東町および日野町にやや広い面積で散在して分布。

1216 ^{やつくち}八口統：表層腐植 5%以下。次表層位礫、斑紋あり。黄褐、壤質。60cm以下円礫に頗る富む黄褐、砂壤土。永源寺町杠葉尾に少面積で分布する。

1217 ^{いじりの}井尻野：表層腐植 5%以下。次表層位円礫、角礫に頗る富む黄褐の壤質。斑紋あり。湖東町祇園、永源寺町山田および日野町各地に少面積で分布する。

③ 灰色低地土

（細粒灰色低地土、灰色系）

1302 ^{よつくら}四倉統：表層腐植 5%以下、全層強粘質、灰色。次表層位斑紋あり。日野町西大路に極く少面積で分布する。

1303 ^{まが}佐賀統：上記の統に類似するが、斑紋、結核に富み、構造が発達している点異なる。分布域も上記の統と同じ。

1305 ^{かもじま}鴨島統：表層腐植 5%以下。次表層位斑紋あり、灰色粘質、構造あり。70cm以下強粘、黄褐で斑紋に富む。秦荘町、湖東町、愛東町、永源寺町、日野町の各地で広範囲に分布する。

1306 ^{たからだ}宝田統：表層腐植 5%以下。全層灰色で粘質、斑紋、構造あり。愛東町、日野町で上記の鴨島統に混在あるいは隣接して分布する。

（中粗粒灰色低地土、灰色系）

1307 ^{かも}加茂統：表層腐植 5%以下。次表層位斑紋あり。灰色壤質。秦荘町蚊野、永源寺町高木、日野町川原、同町小井口に少面積で分布する。

1308 ^{きよたけ}清武統：表層腐植 5%以下。次表層位斑紋、結核に富む。灰色、壤質。愛東町園、日野町中之郷に少面積で分布する。

（礫質灰色低地土、灰色系）

1310 ^{くせだ}久世田統：表層腐植 5%以下、次表層位斑紋あり、粘質。40cm以下礫層。日野町仙に少面積で分布する。

1311 ^{おつこのぎ} 追子野木統：表層腐植 5%以下、全層灰色、次表層壤質、斑紋あり。40cm以下礫層。愛東町平尾北西部。永源寺町高木北部でやや広範囲に分布する。

1312 ^{こくりよう} 国領統：表層腐植 5%以下。全層灰色、次表層位は円礫、角礫に富み、斑紋あり。55cm以下礫層。湖東町、愛東町の山脚から平坦にかけて、また愛知川、和南川、日野川および佐久良川沿岸に広く分布する。

(細粒灰色低地土、灰褐色)

1315 ^{かねだ} 金田統：表層～次表層位にかけての腐植含量 5%以下。全層粘質、次表層位以下斑紋あり、灰褐。日野町河原で少面積が分布する。

1317 ^{やすき} 安来統：表層腐植 5%以下。次表層位以下壤質、灰褐、斑紋あり。

1318 ^{ぜんつうじ} 善通寺統：表層腐植 5%以下。次表層位斑紋、結核あり、灰褐、壤質。八日市市寺町に上記土壌統と混在する。

(礫質灰色低地土、灰褐色)

1321 ^{まつもと} 松本統：表層腐植 5%以下。斑紋、礫含む。次表層位以下、斑紋あり。礫に頗る富む。壤質。灰色。愛東町曾根、青山に分布する。

1322 ^{かやま} 柏山統：表層腐植 5%以下。斑紋、礫含む。30cm以下礫層。愛東町青山、八日市市池田東部でやや広く分布する。

(灰色低地土、下層黒ボク)

1324 ^{のいち} 野市統：表層腐植 5%以下。次表層位腐植に富む。黒色、粘質。斑紋、礫含む。秦荘町上蚊野に分布する。

1325 ^{たかき} 高崎統：上記の野市統とは土性が壤質である点異なる。永源寺町池之脇南東部、同町市原野および日野町仁本木から河原にかけてやや広範囲に分布する。

④ グライ土

(細粒強グライ土)

1402 ^{たがわ} 田川統：表層腐植 5%以下。次表層位青灰、強粘質。50cmまで糸状、管状斑紋あり。作土直下からグライ層出現。日野町原、永源寺町和南の谷津田に少面積で分布する。

1404 ^{ひがしうら} 東浦統：上記田川統とは土性が粘質である点異なる。日野町中之郷から同町奥師にかけての中山間田でやや広い範囲で分布する。

(中粗粒強グライ土)

1406 ^{たまお} 滝尾統：表層腐植 5%以下。壤質、斑紋あり。作土直下よりグライ層出

現。永源寺町新出、日野町杉に分布する。

(礫質強グライ土)

1410 ^{ふかざわ} 深沢統：表層腐植 5%以下。次表層位青灰粘質。斑紋、礫あり。60cm以下礫層、作土直下からグライ層出現。永源寺池之脇東部、日野町北畑に少面積で分布する。

1412 ^{みなかみ} 水上統：上記深沢統とは土性が壤質である点異なる。日野町小野、同町原に少面積で分布する。

1414 ^{おおす} 大洲統：表層腐植 5%以下。次表層位青灰。礫含む壤質。30cm以下礫層。作土直下からグライ層出現。八日市市今代、永源寺町山上、日野町奥師に分布する。

(細粒グライ土)

1416 ^{はたの} 幡野統：表層腐植 5%以下。全層強粘質。25cm以下糸状、管状斑紋あり。40cm以下グライ層出現。永源寺町和南南部、日野町村井北部に少面積が分布する。

1419 ^{あそうず} 浅津統：上記幡野統とは土性が粘質である点異なる。秦荘町軽野、永源寺町市原野、同町和南西部に分布する。

(中粗粒グライ土)

1421 ^{にいやま} 新山統：表層腐植 5%以下。次表層位灰色、壤質、下層青灰、壤質。50cm以下グライ層出現、斑紋あり。日野町鳥井平に少面積で分布する。

1423 ^{やわた} 八幡統：表層腐植 5%以下。次表層位青灰、砂。斑紋あり、グライ層出現。永源寺町池之脇に少面積が分布する。

(グライ土、下層黒ボク)

1425 ^{たかほた} 高幡統：表層腐植 5%以下。次表層位腐植に富み粘質、斑紋あり。グライ層出現。秦荘町香之庄のみに分布する。

畑の土壤統

① 黒ボク土

(表層多腐植質黒ボク土)

0320 ^{みやだいら} 宮平統：表層腐植10%以上。次表層位、腐植に富み、礫に頗る富む。日野町池之脇南西部小丘陵台地上に分布し、堆積様式は洪～水積。茶園、飼料畑に利用している。

② 褐色森林土

(礫質褐色森林土)

0620 泉南統^{いずみみなみ}：表層腐植 5-10 %、次表層位、腐植含む黄褐の粘質土、礫に頗る富む。永源寺町政所に分布。堆積様式は崩積。茶園利用。

③ 灰色台地土

(礫質灰色台地土)

0712 塩田統^{しおた}：表層～60cmまで腐植 5%以下。礫を含む壤土。斑紋あり。下層、黄褐、礫層。永源寺町君ヶ畑。堆積様式は崩積。茶園利用。

各土壌群の農業利用上における一般的特性

本図幅内に分布する各種土壌群の農業利用上の一般的特性をみると以下のとおりである。

① 黒ボク土

腐植含量が高く、保水力が大きい、塩基、リン酸含量に乏しい。

② 褐色低地土

土壌生産力は概して高く、土壌の理化学性は一般に中～良である。

③ 灰色低地土

排水は一般に中～やや不良であり、地力^①は中～良。礫質灰色低地土水田では、水稻の根圏域が狭くなり、透水性が大きいことから養分の流亡も多く秋落ちしやすい土壌である。

④ グライ土

一般に地下水水位が高いが、整備に伴い乾田化しつつある。強グライ土では土壌還元が強い。構造の発達弱く易耕性に欠ける。地力^①は概して高い。

参考文献

滋賀県農業試験場：地力保全基本調査総合成績書（1978）

農水省農業技術研究所化学部土壌第3科：農耕地土壌の分類（第2次案改訂版）

国土庁土地局：土地分類基本調査、彦根東部（1986）

国土庁土地局：土地分類基本調査、近江八幡（1982）

Ⅳ 地形断面図・傾斜区分図

地形断面図

A－B断面は釈迦ヶ岳山頂と八日市台地上の八日市市瓜生津町を結んで設定されたもので、鈴鹿山脈の中央部を東西に横断して、この山地が西方へ向かって階段状に低下していることを示し、布引山（八日市）丘陵の東北端をかすめて、八日市台地を東西に縦断している。

A点は、布引山丘陵の北麓に形成されている小規模な急傾斜扇状地上、瓜生津集落の南西に位置し、その東には、西に向かって平均傾斜10%でごく緩やかに傾斜する八日市台地の低位段丘面が広がっている。この台地の東端には和南川が浅い谷を刻んでおり、その台地側の谷壁は比高約10m、谷底には幅200m前後の谷底平野が形成されている。

和南川河谷の東を限るのは丘陵性の低い中間斜面山地で、その稜線を越えた東側、渋川の谷には布引山丘陵の東北端に当たる丘陵地が見られ、渋川の右岸（東岸）は崖錐性の緩斜面になっている。

この緩斜面を過ぎると、断面線は鈴鹿山脈に入るが、佐目子谷川までは雨乞岳山塊北西端の山地をかすめているため、断面図では標高300～500mの起伏が示されているにすぎず、中間では永源寺ダム南岸に見られる小さな中位段丘を横切っている。

佐目子谷川の右岸は比高数100mにも達する急斜面で限られており、その東、神崎川の谷までは、雨乞岳山塊東北部の主稜線を横断している。この山塊はほとんど全域が急斜面山地で、断面線が横断している稜線の標高800m前後は、標高1,000mを越える雨乞岳山塊の中心部より幾分低くなっている。

神崎川の谷を過ぎると、断面線は鈴鹿山脈の中核をなす御在所山山塊を横断する。この山塊では、稜線部と山塊を取り巻く部分は急斜面山地になっているが、その中間には相対的に起伏量が小さく谷密度が大きい中間斜面山地が分布しており、断面図にもその一部が示されているが、このような状況が最も明瞭なのは断面線のやや北方、赤坂谷の上流域である。

これに対しC－D断面は、藤原岳山頂の北方から日本コバを通過して鈴鹿山脈の中央部を斜断し、八日市台地の東部と布引山丘陵を横断するように設定した。

起点のC点は、東西に伸びる布引山丘陵の中央部南端に当たり、断面線はここ

から池川の開析谷北側の丘陵を北東に向けて横切っている。布引山丘陵東半部では稜線が丘陵の北に偏っているため、断面図のはじめ2 kmほどは標高200 m 足らずの小起伏が続いているが、これを過ぎると標高250 m まで高くなって稜線を越え、丘陵の北側は比高約40 m の急斜面となって、その麓に小規模な複合扇状地が形成されている。

断面線が横切る八日市台地の東端は、標高200 m 強の平坦地であるが、和南川の河岸段丘を形成した堆積物が扇状地状に堆積しているため、中央部は若干の膨らみを見せている。永源寺町山上集落の南辺で愛知川に臨む段丘崖は比高約15 m で、その崖下には山上集落を乗せる最低位段丘がある。この段丘面は標高190 m 前後、愛知川の河床に面する段丘崖は比高5 m 足らずで、沖積段丘に相当する。愛知川の右岸には幅150 m 程度の扇状地性低地が谷底を形成しており、高野集落を乗せる下位段丘（段丘面の標高200～215 m）と、高野集落背後の中位段丘（段丘面の標高230～240 m）がこれに続いて、山麓には崖錐性の斜面が付着している。

鈴鹿山脈にさしかかると、断面線は日本コバ山塊南西部の急斜面を、堂後谷・松尾谷などの深いV字谷を経ながら、標高900 m 強の日本コバまで一気に上昇する。日本コバの山頂付近には、標高800 m 以上にかんがりの広がりをもつ小起伏地が見られるが、断面線はその南部をかすめるにすぎない。ここから御池川の谷底までは、藤谷川の谷を挟んで低下し、ついで御池川と茶屋川とに挟まれた尾根を、尾根の走向に従って縦断している。このためこの部分では、顕著なピークは示されていない。

茶屋川最上流の集落である永源寺町茨川の北で、断面線は茶屋川を横切るが、茶屋川の河床はすでに標高570 m と高くなっているため、谷自体はそれほど深くはない。茶屋川を渡ると御池岳山塊南端の急斜面となり、標高1,100 m を越える藤原岳の山頂まで比高400～500 m にも達する急崖が続いている。この急斜面の上に見られる小起伏地は、藤原岳山頂から北西に続くもので、御池岳山頂付近に見られる小起伏地に対応するカルスト高原である。

傾斜区分図

傾斜区分図は、5万分の1地形図を用いて、斜面や山麓について、主として主

曲線の等高線間隔を計測して傾斜を求め、それを階級区分して作成した。なお、傾斜の小さい地域を計測する場合には2万5千分の1地形図を併用し、さらに図の表現に当たっては、作図および印刷上の都合により、若干の統合・簡略化を行った。また、小規模な段丘崖の部分は面積が極めて小さいため、傾斜区分の対象にしなかった。

傾斜の階級区分は、40°以上を(A)、40~30°を(B)、30~20°を(C)、20~15°を(D)、15~8°を(E)、8~3°を(F)、3°未満を(G)として、7階級に区分した。本図幅中の傾斜は7階級すべてにわたって見られる。

傾斜の分布を概観すると、鈴鹿山脈ではA~B級が卓越する一方、小起伏地や中間斜面山地の部分ではC~E級となり、山間の谷底平野や河岸段丘はE級になっている。これに対し、丘陵地ではD~E級が卓越し、相対的に標高が高く、起伏量も大きい布引山丘陵や日野丘陵の東部ではC級が多くなっている。鈴鹿山脈西麓の崖錐性斜面は、上部はE級であるが末端はF級になっており、急傾斜扇状地と谷底平野はおおむねF級である。八日市台地や佐久良川・日野川の河岸段丘、および緩傾斜扇状地はいずれもG級になっている。

以下、多様な傾斜分布を示す鈴鹿山脈について検討してみよう。鈴鹿山脈の主要部は、大部分が急斜面山地に区分され、A~B級の傾斜になっているが、A級斜面の分布には、若干の偏りがある。すなわち、A級斜面が卓越するのは、本図幅の北辺に近い御池岳山塊南部と日本コバ山塊の北部、および本図幅南部の雨乞岳山塊の中心部で、ことに藤原岳の西斜面や宇曾川ダムと犬上川ダムとの間の山地、雨乞岳と綿向山との間の白倉谷川の谷ではA級斜面が連続しており、雨乞岳山塊の北部を刻む佐目子谷川の右岸にも大きなA級斜面が見られる。

これに対し、御在所山山塊と日本コバ山塊の南部、および佐目子谷川の右岸を除く雨乞岳山塊の北部ではA級の斜面が少なくなり、B級斜面のほうが卓越している。御在所山山塊では、釈迦ヶ岳や八風峠の西方にかなり広い中間斜面山地が分布しており、ここではC級斜面が多く、部分的にはD級やE級の傾斜も見られる。一方、日本コバの山頂付近、標高800 m以上のところにはC~E級に区分される小起伏地があり、犬上川源流の谷を隔てたところはC級の中間斜面山地になっている。

V 水系図・谷密度図

水 系 図

水系図は、5万分の1地形図の河川記号と、等高線の屈曲とから水系と谷系とを読み取り、さらに2万5千分の1地形図や空中写真を利用して谷系を補充して作成した。

本図幅中の滋賀県側の水系はすべて琵琶湖水系に属している。これらのうち、本図幅の中央部、日本コバ山塊中央の谷を集め、犬上川ダムで北接する「彦根東部」図幅に入っているのは犬上川（南谷）で、犬上川の本流である。角井峠の東斜面に発して東流し、北西から釣部谷、南から横根谷を入れて、標高360～480mに愛東町大萩の集落と耕地になっている谷底平野を形成した後北に向きを変え、今度は深いV字谷を刻んで犬上ダムに注いでいる。犬上ダムはこのほか、南東方から板ヶ谷を入れている。本図幅の範囲を出た後犬上川は、大杉川、犬上川（北谷）などを合流して多賀町富之尾の南方で湖東平野に出、彦根市街の南で琵琶湖に注いでいる。犬上川本流の流路延長は27.7km、本流のみの流域面積は54.8km²であるが、支流をも含めた犬上川全体の流域面積は105.3km²にのぼる。

日本コバ山塊西斜面のうち、大峠以北の水を集めて流出しているのが宇曾川で、本流は湖東町の東部、押立山（771.8m）の東に発し、秦荘町との境界をなして流下する。谷口に近い溪谷に治水用の宇曾川ダムが建設され、湖東町祇園の東方で山地を出ると、小規模ながら見事な扇状地を作っている。本図幅に含まれているのはここまでであるが、扇状地の末端からは川幅も狭くなり、南の愛知川と犬上川とが形成した平野の接点を流れる排水河川となって、荒神山の東側から北側を通過して琵琶湖に注いでいる。宇曾川本流の流路延長は22.0km、本流のみの流域面積は6.2km²と小さいが、この川には沢山の支流があり、それらを合わせた宇曾川全体の流域面積は69.9km²になる。

宇曾川の支流のうち、本図幅には南川とその支流である北川・五の谷川・ドン川が含まれている。南川は愛東町百済寺の東方、大峠の西斜面から流出して北西流し、百済寺丘陵を南北に分ける谷に同町北古屋を扇頂とする急傾斜扇状地を形成した後、湖東町今在家で五の谷川と北川を入れ、秦荘町島川で宇曾川に合流している。本流の流路延長9.0km、支流をも含めた流域面積は23.6km²である。五の

谷川は百済寺丘陵南部から、北川は百済寺丘陵北部から流出する排水河川であり、ドン川も愛東町上山集落の東方から流れる小河川である。

本図幅中に最も広い流域を有しているのは愛知川で、鈴鹿山脈中央部の水を広く集め、湖東平野を涵養して琵琶湖に注いでいる。本流の流路延長は52.9 kmだが、支流をも含めた流域の総面積は203.5 km²で、これは琵琶湖に流入する河川のなかでは、野洲川の387.0 km²、姉川の371.4 km²、安曇川の310.1 km²、日野川の214.0 km²に次いで、5番目に大きい。愛知川の流域は本図幅内でもいくつにも分かれており、以下それらを上流から順番に概観することにする。

愛知川の源流は茶屋川と呼ばれ、「彦根東部」図幅に属する御池岳と白瀬峠との間の谷から流出して南南東流し、本図幅に入って間もなく、藤原岳の西方に三筋滝を形成している。この後河道は南南西に向きを変えて茨川を通り、御在所山山塊と日本コバ山塊との間を画す深い谷を刻んで流下している。この間、竜ヶ岳の西斜面からは又川を、石樽峠からは古語録谷を、八風峠からは八風谷を入れ、永源寺町杠葉尾で、南から流れてきた神崎川を合わせている。茶屋川の本流は、谷底平野や河岸段丘をほとんど欠如しているV字谷であるが、支流の八風谷下流には小規模ながら河岸段丘が形成されており、古語録谷の中流にもごく小さな谷底平野がある。茶屋川だけの流路延長、流域面積は計測されていない。

これに対し神崎川は、雨乞岳東斜面のクラ谷を水源とし、沢谷峠の北斜面を流下する沢谷、御在所山西斜面に発する黒谷などを合わせて、御在所山山塊と雨乞山山塊との間を北流している。東の御在所山山塊からは、国見峠に発する上水晶谷、根ノ平峠に発するタケ谷、中峠（黄和田峠）に発する下水晶谷、ハト峰峠に発するヒロ沢、釈迦ヶ岳の西斜面から流下する白滝谷とツメカリ谷など多くの谷を合流させているが、西の雨乞岳山塊からの谷は、谷尻谷と風越谷を除いてはいずれも短小な急流が多い。中・下流部は穿入蛇行をなし、天狗滝などの渓谷美に優れ、神崎川発電所も建設されている。流路延長は12.5 km、流域面積は29.1 km²である。

杠葉尾で茶屋川と神崎川が合流した愛知川は、北西に向きを変え、御池川を合流させる付近までの間、杠葉尾や黄和田・中畑・蓼畑の集落と耕地を乗せている河岸段丘を形成している。これらの河岸段丘の多くは下位段丘に分類されるが、段丘面の形状や段丘崖の比高は多様で、さらに幾つかに区分可能である。杠葉尾

集落の背後には、段丘面の標高 330 ～ 360 m の中位段丘も見られる。

蓼畑集落の西で愛知川に合流する御池川は、「彦根東部」図幅に属する御池岳北方の鈴ヶ岳に発し、南東流して本図幅に入った後も、土倉岳南斜面から流出する桂谷を合流させるまではそのまま流れ、その後は南西に向きを変えて君ヶ畑經由箕川に至り、ここで今度は南に向きを変えて愛知川に注いでいる。この間の谷はほとんどが深いV字谷で、僅かに君ヶ畑・蛭谷・箕川・政所の集落を乗せている部分のみが小さな河岸段丘になっている。御池川に流入する谷は、桂谷を除いて、いずれも短小な急流である。御池川の流路延長は 17.2 km、流域面積は 32.0 km² である。

御池川を入れた愛知川は、間もなく西から、日本コバの東斜面の水を集めて流下してきた藤川谷を合わせ、比高 400 ～ 500 m にも達する深い峡谷を穿って南西流し、永源寺ダムになっている。永源寺ダムは、24年 4 か月という工期を費やし、昭和51年12月に国営愛知川灌漑排水事業の一環として完工した多目的ダムで、農業用水の供給を主目的としている。貯水量 2,274 万 m³ で、堰堤は高さ 73.5 m、長さ 392 m の重力式および土石混合堰堤を結合したものである。永源寺ダムの左岸には、杉峠の北方から北北西流し、下流部右岸に比高 600 m 強という本図幅中最大の急斜面を形成している佐目子谷川が注いでいる。

永源寺ダムを過ぎると愛知川は、沿岸に河岸段丘を形成して西へ流れ、北からは松尾谷と堂後谷を、南からは渋川と和南川を入れている。松尾谷と堂後谷とは、日本コバ山塊の南辺を限る急斜面を流下する急流であるが、渋川と和南川とは、雨乞岳山塊の奥深くに源を有する、かなり流路の長い河川である。

これらのうち渋川は、雨乞岳の西斜面から流れ出し、中流部に小さな谷底平野を作った後、再び峡谷を刻んで、下流部では丘陵地を流下する部分に中位段丘を残し、最下流部では愛知川南岸の下位段丘を刻んでいる。流路延長 11.0 km、流域面積 15.1 km²。

一方、和南川は綿向山の北斜面に源を発して北北西流し、永源寺町甲津畑からは布引山（八日市）丘陵の東端に幅の広い谷を刻んで流れ、布引山丘陵の東南端から流出してくる井の谷川を和南集落の南方で入れた後、永源寺町山上で愛知川に注いでいる。甲津畑から下流の谷には河岸段丘が発達しており、この段丘面の下流部は八日市台地に続いている。河岸段丘が八日市台地に移行した部分を刻む

和南川の谷底には、狭長な谷底平野が形成されている。和南川の流路延長は 8.8 km、流域面積は 7.1 km²で、井の谷川のはそれぞれ 2.4 kmと 1.1 km²である。

和南川を入れた後、愛知川は、八日市台地を刻んで形成した幅の広い浅い谷を、ゆったりと曲流しながら西北西へ向かい、谷底は平均勾配 6.3 ‰の緩傾斜扇状地になっている。この部分の河道は人工堤防によって固定されているが、河原の幅は 150 ～ 300 m と広く、その中を流れる流路はいくつにも分かれて、扇状地の河川に特有の網状流路になっている。愛知川は、この谷を流れる間、左岸側からは流入河川を持たないが、右岸側では、愛東町小倉集落の南東で千手川を、本図幅西端の春日橋（国道 307 号線）下流で加領川を、それぞれ北東方から合流させている。

千手川は、日本コバ山塊の南西辺、明神山北西方の谷から流出し、谷口に崖錐性斜面を形成している。この崖錐性斜面の末端は、八日市台地北岸の南東端で、中位段丘の段丘崖および下位段丘の段丘崖を覆い、最下位段丘の段丘崖に達している。千手川の流路延長は 2.8 km、流域面積は 1.4 km²である。

一方、加領川は角井峠西斜面の谷から流れ出して西流し、谷口に標識的な急傾斜扇状地を形成した後、名神高速道路の南辺に沿って南西流している。この途中、愛東町下中野の西方では経田川を合流させる。経田川とその支流、豊国川および棚上川は、これまたいずれも日本コバ山塊南西辺の急斜面を形成した後、八日市台地北岸の下位段丘面上を北西流する間に次々と合流する小河川で、経田川の流路延長は 4.2 km、流域面積は 2.3 km²であり、豊国川のそれは 2.9 kmと 0.9 km²、棚上川のそれは 4.0 kmと 2.1 km²である。加領川本川の流路延長は 6.9 km、流域面積は 5.4 km²。

八日市台地のうち、愛知川南岸の下位段丘面を流れる流水は愛知川には供給されず、蛇砂川に集められて西北西に運ばれ、西之湖、長命寺川を経て琵琶湖に注いでいる。蛇砂川は永源寺町和南の南方、布引山丘陵の東端近くに細長く刻み込まれた開析谷を北北西流して八日市台地に出、その後は西に向きを変えて、布引山丘陵の北斜面から流出する排水、および台地面の排水を集める一方、台地面に灌漑用水を供給する役割をも有している。このため平時は水量が少なく、中流では水無川にさえなっているが、大雨が降るとしばしば氾濫することもあった。蛇砂川の流路延長は 28.1 km、流域面積は 61.6 km²である。

本図幅の南西部、布引山丘陵の分水界以南に当たる日野町域は、すべて日野川

の流域に属しているが、本図幅に示されている日野川の本流域は、源流域に近いごく一部に限られている。日野川は、本図幅の南辺に示されている綿向山の南斜面に発し、南接する「亀山」図幅に属する日野町熊野・平子・蔵王地区を経て再び本図幅の南西辺に姿を見せ、日野川河岸段丘を形成して西流している。日野丘陵南部の西端を横切るところには、昭和41年日野川ダムが完成した。日野川はその後、佐久良川をはじめとする多くの支流を合わせ、湖東平野南部を潤して、近江八幡市佐波江地先で琵琶湖に注いでいる。本流の流路延長は43.5 km、支流をも合わせた流域の総面積は214.0 km²で、流域面積は愛知川よりも大きい。また、日野川河岸段丘の東端は、日野川上流の支流、西明寺川によって形成されたもので、この川は綿向山と竜王山との間の鞍部から流出し、日野町音羽で日野川に合流している。西明寺川の流路延長は5.3 km、流域面積は6.2 km²である。

日野川の支流のうち最も大きな流域面積を有しているのは佐久良川で、本図幅にはその東半部が含まれている。佐久良川の本流は竜王山の北斜面から流出し、布引山丘陵と日野丘陵とを分ける谷を刻んで西流した後、日野町中之郷で竜王山西麓に付着する日野丘陵東端から西北西流してきた前川を合わせ、今度は西北西に流れて蒲生町宮井で日野川に合流している。本図幅に属する佐久良川および前川の谷は、谷底のほとんどが下位段丘に分類される河岸段丘になっており、丘陵を刻む数多くの支流の開析谷には、狭長な谷底平野が形成されている。佐久良川本流の流路延長は19.6 km、流域面積は51.0 km²であるが、このほか本図幅には、布引山丘陵から流出する池川（流路延長2.7 km、流域面積3.8 km²）と杉川（流路延長2.1 km、流域面積1.2 km²）および日野丘陵北東辺の谷から流れ出す互瀬川（流路延長3.6 km、流域面積1.9 km²）の流域が含まれている。一方前川は、流路延長5.1 km、流域面積は8.8 km²である。

本図幅にはさらに、野洲川源流域の一部も含まれている。それは御在所山と雨乞山の南斜面、および綿向山の東斜面で、野洲川の本流およびその支流である白倉谷川の源流域に相当し、いずれも急斜面山地を刻む急流で、谷底平野は形成されていない。

谷密度図

谷密度は、水系図を基礎にして、地形の開析状態を数量的に表現したものであ

る。その作成方法は、5万分の1地形図を縦横40等分した方眼を作り、各方眼区画の4辺を切る谷の数の和を求めて、さらにその数値を隣接する4単位区画ごとに集計した数値で示した。

表1は、谷密度を10ごとに階級区分して頻度分布を求めたものである。本図幅中の谷密度はⅠ～Ⅷの階級に及び、最も頻度が高いのはⅣ階級（谷密度30～39）

表1. 谷密度の階級別頻度分布表

谷 密 度 の 階 級 (谷 密 度)	頻 度	
	区 画 数	構 成 比
Ⅰ (0 ~ 9)	24	7.6%
Ⅱ (10 ~ 19)	24	7.6
Ⅲ (20 ~ 29)	53	16.9
Ⅳ (30 ~ 39)	122	38.8
Ⅴ (40 ~ 49)	75	24.0
Ⅵ (50 ~ 59)	14	4.5
Ⅶ (60 ~ 69)	1	0.3
Ⅷ (70 ~ 79)	1	0.3
計	314	100.0

の38.8%で、以下Ⅴ階級（40～49）24.0%、Ⅲ階級（20～29）16.9%、Ⅰ階級（0～9）とⅡ階級（10～19）の7.6%、Ⅵ階級（50～59）4.5%と続き、Ⅶ階級（60～69）とⅧ階級（70～79）はそれぞれ0.3%にすぎない。

次に、各階級別とその分布を見ると（図1）、Ⅰ階級は宇曾川扇状地および、八日市台地と日野川河岸段丘の段丘面に分布しており、Ⅱ階級はこれらに隣接する宇曾川扇状地南部から百済寺丘陵にかけてのメッシュ、八日市台地の段丘崖を

含むメッシュ、布引山（八日市）丘陵の北斜面とその麓の複合扇状地を含むメッシュ、佐久良川河岸段丘の主要部と日野川河岸段丘の東部を含むメッシュなどに、分散して見られる。

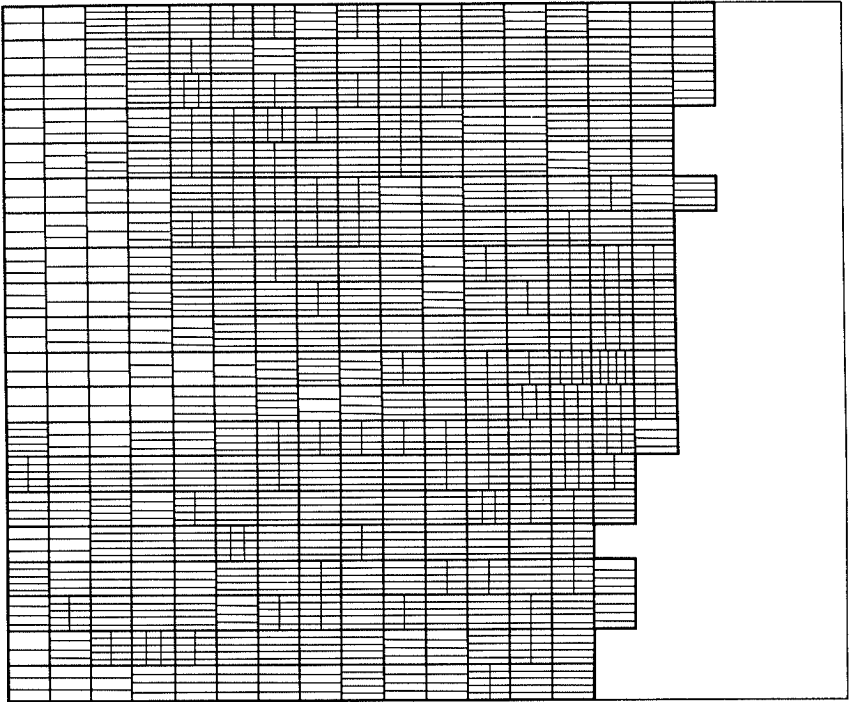
Ⅲ階級になると、分布の分散性はより一層著しくなり、分布域は鈴鹿山脈にまで広がる。おもな分布域は、鈴鹿山脈の西縁と布引山丘陵南部、および日野丘陵の北部で、鈴鹿山脈では藤原岳山頂の小起伏地とこれを囲む急斜面山地、御池川中流の河岸段丘および山麓緩斜面を含むメッシュ、愛知川上流では永源寺町黄和田の河岸段丘と永源寺ダム東部の水面を含むメッシュ、および綿向山の南斜面と雨乞岳の南西斜面などに散在している。

Ⅳ階級に相当するメッシュは、滋賀県域に属する本図幅のメッシュ総数 314のうち、38.8%を占めて最も多く、その分布域は鈴鹿山脈を主とするものの、布引山丘陵や日野丘陵の脊稜部を含むメッシュにまで及んでいる。鈴鹿山脈では、その西辺を限る急崖や愛知川・御池川・茶屋川の河谷、および雨乞岳山塊の北部などに連続して見られるほか、御在所山の山頂と野洲川の源流域、雨乞岳と綿向山の山頂付近にも分布している。

Ⅴ階級のメッシュは、丘陵地では、布引山丘陵の中央部（本図幅の西端）と東部に各1メッシュ、日野丘陵の脊稜部を含む3メッシュに見られるのみで、これら以外はすべて鈴鹿山脈に位置している。鈴鹿山脈では、日本コバ山塊の中央部から北部にかけてと、雨乞岳山塊の北部から北東部にかけてとに集中的に分布しており、御在所山山塊では三重県との県境になっている稜線を含む一連のメッシュがⅤ階級になっているのが注目される。

Ⅵ階級になると、メッシュ数は14、構成比は4.5%と少なくなり、分布域も限られてくる。こうした中で、御在所山山塊の稜線と神崎川の谷との間に広がる中間斜面山地にはⅥ階級のメッシュが集中しており、本図幅ではそれぞれ1メッシュずつしか見られないⅦ階級とⅧ階級のメッシュもまたこの地区に位置して、この地区の谷密度の高さを端的に示している。この地区以外でⅥ階級に相当するのは、日本コバ山塊北西部の宇曾川源流域と宇曾川ダム南東方の各1メッシュ、雨乞岳山塊では神崎川に注ぐ谷尻谷の源流域に1メッシュあり、丘陵地では布引山丘陵の南東端と日野丘陵の東部に各1メッシュ見られるのみである。

図1 谷密度の頻度階級別分布図



I

(0~9)



II

(10~19)



III

(20~29)



IV

(30~39)



V

(40~49)



VI

(50~59)



VII

(60~69)



VIII

(70~79)

1990年3月 印刷発行

土地分類基本調査

御 在 所 山

編集発行 滋賀県企画部土地対策課
大津市京町4丁目1-1

印 刷 東海図版株式会社
名古屋市西区枇杷島5丁目12番5号
TEL (052) 5 2 2-1 3 7 7(代)